

---

moderato.

奏多

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M o d e r a t o .

### 【Nコード】

N 5 6 6 4 C

### 【作者名】

奏多

### 【あらすじ】

夢にまで見た会社で刺激のない生活を送っていたOLが、見知らぬケータイを拾ったことで、バーテンダーをしつつ大学に通う謎の音大生に出会い、刺激のなかった毎日が少しずつ変わっていく。

## # 1 日常

「5時なんで〜お先に失礼します!」

「お疲れ様です!」

……………またか。

派遣社員の、集団キツチリ帰宅。もとい、合コン。

終業時刻キツチリに帰って、商社マンだか医者だかと、バカバカしい話をしながら自分を可愛く装って笑う。

派遣社員が帰ったあとに残されるのは、彼女たちが残した大量の仕事の山。

「黒沢さんもどうですか?もう仕事終わってるじゃないですか!」

呆れて物が言えない。どの面下げて言ってるんだっつもの。

「……………いい。男に困ってないから」

「え〜そうですか?じゃ、お疲れ様です〜!」

早く消えてくれ。

ケバい化粧に振り掛けすぎの香水が鼻につく。

ドアの外から、彼女たちの話している声がする。

「黒沢さん、なに強がってんだろーね」

「仕事終わってんなら見栄張らないで来ればいいのに」

「ま、あんな堅物が来ても盛り下がるだけだしね」

「香織、なんであいつ誘ったの？」

「礼儀よ礼儀。誘われなかったらショックかなって」

「香織優し〜！」

大きなお世話だったの。

私が早く終わらせるのは、あいつらが残した仕事を片付けるためだ。

よく飄々としていられるものだ。

「……………帰っちゃったか。……………黒沢くん……………」

「もう始めてます」

揚げ句の果てに、完全に課長は私を頼っているし、どうしようもない。

私が出社するときには、決まって12時を回っている。無能な派遣社員ばかり雇う今の会社に、少なからず反感を持っていた。

世間ではエリートと言われる部類。そこに、私は当然含まれていた。慶応義塾大学在学中からロスに留学し、学生の間もエリートの勝ち組になるために、サークルもバイトもせず必死で勉強した。一流と言われているこの外資系の会社に入れた時、「勝った」と思った。

仕事自体にはそれなりに満足している。英語も活かせるし、私には合ってると思う。

ただ……………何かが違う。

そう思い始めて、何年が過ぎただろう。

気付けば下には後輩がいて、いつのまにかやめれなくなっていた。

「お疲れ様です」

消灯した社内に残っている社員に声をかけ、トレンチコートを身に纏い、外に出る。

冷たい風が、コートの隙間から私の体を容赦なく冷やす。  
コートをきつく巻き付け、足早に地下鉄への道を急ぐ。

今夜は雪が降るそうだ。

## #2 ケータイ

「…さっむ……………」

トレンチコートをもう一度身体に巻き付け、足早にいつもの噴水広場を横切ろうとした。

通勤するときに必ず通るこの噴水広場は、クリスマスシーズンでライトアップされ、カップル達が所狭しとその幻想的な水の光を楽しみに来ている。

就職してすぐに彼氏と別れてからずっと独り身の私にとって、この周りの状況はかなりストレスの溜まるものだ。

もともと、かくいう私も昔は彼氏に寄り添って見に来ていたわけだから、文句は言えない。

この年になると、人前でイチャイチャしている若者を、本気で哀れんでしまう。

きつとここにいる彼らの何組かは、数年たてば『あれはワカゲノイタリだったなあ…』と呟くに違いない。

周りの雑音をシャットアウトしていた私の耳に、ふいに聞こえてきた着メロ。

「……………ラフマニノフのピアノコン？」

よくよく聞いてみると、知っている旋律だった。

ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番。

最もメジャーなピアノ協奏曲の1つで、クラシックをかじった人なら誰でも耳にしたことはあるだろう名曲だ。

小さい頃からクラシック好きの父親の影響で、よくコンサートに連れていかれたりCDを聴いたりしていたからか、昔からわりとクラシックには強かった。

しかし、わざわざこの曲を着信音に設定するなんて、よほどクラシックに詳しいか、もしくはオタクだ。

足元を見回すと、噴水の隅で黄緑色のケータイが点滅しながら微かに動いていた。

思わず拾い上げると、手の中でバイブが止まった。  
しかし少しして、また鳴り出した。

ケータイを開け、恐る恐る通話ボタンを押す。

「……………もしもし」

### #3 知らない声

『もしもし！あゝ助かった』

電話の向こうから聞こえてきたのは、こっちが驚くほど元気な声だった。

声の調子から、たぶん学生の男。もしくは新卒。

「……………」

『あつ、すみません！拾っていただいてホントにありがとうござい  
ます！』

「はあ……………」

『俺、そのケータイの持ち主なんですけど、それどこに落ちてまし  
た？』

何でこんなにハキハキ喋るんだろう。こんな喋り方する人、うちの  
会社にはいない。

あの派遣のころも彼を見習って、少しでもあのベタベタした口調を  
どうにかしてほしいものだ。

「……………」  
噴水広場です

『あーやっぱり。すみません、すぐに取りにいければいいんですが、まだ仕事中で……』

「あ、届けましょうか？」

口が勝手に答えていた。わけのわからない私とは正反対に、口は次々に言葉を紡ぎ出す。

「私、今時間あるんで。よかったらお勤め先、教えていただけますか？」

今暇だから、じゃなくて今時間あるから、と答えるようになったのは、社会人になってから。

私は暇なんじゃなくて、今たまたま時間があるだけなのよ、と誇示しているみたいに。

そんな言葉が無意識に出るようになったとは、私もだいぶ社会に染まりつつあるようだ。

『え、いいんですか？だったらとても助かるんですが……』

「はい。どちらですか？」

『あゝ……………それじゃあ、まず広場を出て次の信号を……………』

家までの道を通り過ぎ、見知らぬ電話から聞こえてくる聞いたこと  
ない声を頼りながら、夜の道を歩き出した。

#### # 4 出逢い

電話の声にしたがって歩いていくと、来たことのない路地にやってきた。

川が近くに流れている人通りの少ないところに、ひっそりと佇む小さなバー。

『そののバーに入って!』

こころしい。返事をして電話を切ると、恐る恐る近づいてみた。

「……モデラート……」

ヨーロッパのパブを思わせるような、小さくも上品な店のドアに、木でできた手書きの看板がかかっている。

《OPEN》

そつと木のドアを押すと、ドアの近くで小さくベルが鳴った。

中はレトロなパブ調の雰囲気で、小粋な深い焦げ茶色の木のカウンターと、それに見合った椅子が数個あるだけだった。

「あの……………」

店の奥に向かって声をかけると、中から青年が一人でてきた。

「はい！ケータイ届けてくれた方ですね？本当に助かりました！」

「はあ……………あ、これ、ケータイです」

慌てて黄緑のケータイを差し出すと、彼は嬉しそうに受け取った。

「あつ、じゃあ私はこれで……………」

「あの、よかったら一杯どうですか？今日のお礼です」

そう言って、椅子の一つを引いた。

その動作があまりにも優雅だったので、それに惹かれてゆっくり席についた。

「……あなたがバーテンダーさん？」

「はい。今夜はどういった風にいたしましたしょう？」

「あなたにまかせる」

しなやかな指使いで次々とブレンドしていく。

その動きに見とれていると、ふいに話し掛けられた。

## #5 音大生

「……………OLさん、ですよね？」

突然かけられた言葉に、しばし驚いてから口を開く。

「突然びつくりした」

「あ、すみません（笑）落ち着いてるし、OLさんかなあ〜って」

「……………まあ、間違っではないよ」

「よかつた〜！これで実は政治家です！とかだったら怒られますもんね〜」

人懐こく微笑む彼に愛想笑いをして、静かに肘をカウンターにのせた。

きつと彼に会社のことを話しても、  
『すっげ〜、一流じゃないですか〜！』  
ぐらいの返答しか返ってこないだろう。

「……………ラフマニノフ、好きなの？」

話題を着メロにふった。仕事の話に戻すことなく、その話題にのってきた。

「あ、やっぱり聞いてましたよね」

意外に雰囲気読む奴なのかも。

派遣のコらより年下ぽいのに。

「うん、あれピアノコンの2番だよね」

「ご存じでした？もしかしてクラシック……………」

「……………実はわりと得意だったり。あなたも？」

「まあ……。俺、音大生なんです」

照れたように頭をかくと、カクテルを差し出した。

出されたカクテルを一口飲むと、爽やかな甘さが口の中に広がった。

「……………おいしい」

「ありがとうございます！」

はにかみながらまた笑うと、ゆっくりとカウンターの椅子に腰掛けた。

「で、どここの音大？」

「あつ、青葉ヶ丘音大です」

「えっ、あのヨーロッパみたいなの？」

向かいに座る彼に聞くと、微笑んで頷いた。

私立青葉ヶ丘音大とは、かなり多くのプロの演奏家を輩出している、入るのも在籍するのも難しい、リッチな大学だ。

純白の壁にかかるツタの葉。

美しい鐘の音を響かせる、背の高い時計台……………。

「本当はあの外観、ちょっと恥ずかしいんですけど」

「何科？」

「ピアノ科です。指揮科と迷ったんですけど、やっぱり楽器にしま

した」

「あ、だからピアノコン！」

「はい。今度弾くんで……」

そこで一度、会話が止まる。

沈黙を破らないよう、静かにグラスに唇をよせる。

「……………お名前、聞いていいですか？」

「人に聞くときは、まず自分から」

「あ、そーでした（笑）俺、千崎優也です」

「え、もしかして、千崎病院と何か関係ある？」

近くに建っている私立病院の名前を思わず出すと、少し笑って彼は言った。

「……………いや、全然関係ないですよ」

「そっか……………」

彼とそこまで親しくない私は、彼のその微妙な表情の動きに、気付くことができなかつた。

## # 6 名前

「はい、次はあなたの番ですよ。」

彼が名乗ったら自分も名乗ると言い出したのは、私だ。

仕方ない。

「……………黒沢です。」

「黒沢なにさん？」

何の悪気もなく聞いてくる。

まあ、普通は自分の名前を名乗るくらい、何でもないことなんだからうけど。

「……………」

「？」

「……………香帆…です。」

下を向き、できるだけ小さく言った。

しかし二人以外には誰もいない店内で、しかも耳がいいだろう音大生の彼が、聞き落とすはずがない。

「香帆さん？かわいい名前〜！」

「……………私、この名前、すごいコンプレックスなの」

そう、自他共に認める《頭脳明晰》《品行方正》《容姿端麗》……………  
…。そんな私の唯一とっていいコンプレックスは……………

この、『香帆』って名前。

「え、コンプレックスなんですか？何で？」

「……………私には、似合わない。こんな女の子らしい名前、合わないの。……………ずっとこの名前が、嫌いだった」

『貴子』とか『麻美』とか、そういうデキる女風の名前に憧れてた。

『香帆』なんて名前じゃ、仕事ができる風に聞こえない。

名乗ったときだって、印象が変わる。

エリートになりたかった私にすれば、大きな大きなコンプレックスだった。

「……そっかな？俺は、黒沢さんにすっげー似合うと思いますよ」

「……うそ……」

いつの間にか興奮して目が潤んでいた私に、彼は優しく微笑んだ。

「本当です。外見はデキる人みたいに見えますけど、実は中身は女の子らしい一面とかありそうですもん」

「……………」

「店の内装とか見るの、好きでしょ」

「……………うん」

「この店に入ったとき、思ったんだ。『あ、この人インテリアとか好きなんかな』って。この店にもたまにキツそうなお嬢さん来るけど、カウンターの形とか、気にも留めないよ」

私がカウンターとかに目を向けてるのを見て、そう感じる人もいたんだ……………。

「……………それ、なくさめてんの？（笑）」

「そのつもりだったけど、実は自分で何が言いたいかわからなくなった（笑）でも、つまりさ、『名前嫌い』なんて言っちゃ、ダメですよ」

こんな人、初めてだ……………。

今まで私の名前の悩みを聞いても、テキトーに私に合わせて頷く人ばかりだった。

変なバーテンダー……………。

「……………変な人」

そう言って笑った私に、微笑んで新しいカクテルをつくってくれた。

## #7 天気予報

「じゃ、そろそろ帰りましようか！」

あれからどれくらいたったのだろうか。

私は日頃の仕事疲れと、コンプレックスだった名前を褒めてくれた安心感から、すっかりカウンターで眠っていた。

気付けば肩には黒いジャケットがかけられていて、一目で彼がかけしてくれたのだと分かった。

「ごめんなさい、話きいてもらっという寝ちやうとか…」

「ん？いえ、俺もちよつと寝てましたから」

店の電気が少し暗くなっていたり、カウンターにあったはずのワイングラスがなくなっているのを見れば、それが嘘なのくらいすぐわかる。

自然と気を使える奴なんだなあ…。

「送ります。俺も明日学校なんで、そろそろ帰らないと」

「いいのに、そんなの」

「今何時だと思ってるんですか？絶対送ります！」

ムキになって言う彼が、一瞬すごく幼くみえた。

さっきまでは大人っぽかったのに、やっぱり学生だ。

「入口のところで待ってもらえますか？裏口から鍵かけるんで」

そう言って、店の奥まで入っていった。

まだ肩にかかっていたジャケットを丁寧にたたみ、自分のトレンチコートを羽織る。

外に出ると、予報どおり雪が降っていた。

「おまたせ」

裏口から彼が顔を出した。

ジャケットを渡すと、ありがとう、と言って袖に手を通した。

「寒いですね」

「…雪だからね」

「俺さ、天気予報できるんですよ」

空を見上げながら、突然言った。

「うそー。ただの学生クンが？」

「まあ、予言って言ったほうが近いですけど（笑）」

少し得意げに話す彼は、完全にバーテンダーから普通の学生に戻っていた。

「じゃあ明日は？」

「ん〜……たぶん、雨ですね。雪降るほど寒くなりませんよ」

「何でわかるの？」

「カンです。でも8割くらいあたりますから！あ、じゃあもし外れたら、明日またカクテルサービスします」

「本当？明日もし晴れたら、大学まで乗り込むかもよ」

冗談で言ったこの言葉に、彼は嬉しそうに笑った。

「絶対雨です！……でも晴れかも」

「なにそれ（笑）」

雪のちらつく真夜中に、二人の声だけが夜空に響いていた。

## #8 音色

快晴だった。

冗談だったとはいえ、『学校にのりこむ』と言ったときのあの嬉しそうな顔が頭の中をよぎり、行かないのはなんだか悪い気がした。

しかも今日は仕事も休み。

正直、また話したいような微妙な気分。

バーテンダーとあんなに話すなんて、初めてかも。

まあきつと、彼が何も知らない学生で、しかも音大生なんて、よほど裕福な生活を送ってきただろう人だからなんだろうけど。

私とは、店以外では全く無関係な人だし。

行くか、行かないか……。

……ちょっと覗くだけなら、いいかな。

でも、なんかイタイ女みたい。

もしかして、これが彼のバーテンダーとしての、客を呼ぶ魅力ってやつなのかも。

すっかり見事に引っ掛かってる私。

私みたいな社会人が大学に行って学生を探すなんて。

私のエリート意識の塊が、《恥ずかしいからやめろ！》と叫んでい

そんな塊とは裏腹に、手は勝手にインターネットに接続し、大学までの行き方を調べていた。

「ここが、青葉ヶ丘……」

イメージどおり（もしかしたら+かも）のヨーロッパ風の建物。

門から中に入ると、様々な楽器の音色が聞こえてくる。

バイオリン、フルート、チェロ……あれはトロンボーンがテューバとアンサンブルしてる音。

日常の私とは掛け離れた、別世界のようなところ。

慶応とは全然違つ、華やかで自信に満ち溢れた場所。

ピアノ科の構内に入ると、たくさんのレッスン室から漏れるピアノの音が波のように溶け合い、妙に気持ちよかつた。

と、一つのレッスン室の中で、ひたすらレッスンを受ける彼を見つけた。

昨日みたいな優しい笑顔じゃなくて、ハングリー精神旺盛な、真剣な顔つきで譜面を睨んでいた。

目はなせなくて、思わずじつと廊下から見つめていた。

隙間から少し漏れてくる彼のピアノは、甘くて少し切なく、心地のよい響きだつた。

ここの誰よりも上手くて、いや、上手いとかそんなレベルではなく、  
とにかく他の音大生とは格段に違っていた。

技術も、真剣さも。

## #9 快晴

「優也、そろそろレッスン終わる?」

「あーそうだね。じゃあみんなでご飯いこー!」

廊下に突っ立っていた私の耳に、学生の会話が聞こえる。

まずい。ここにいたらバレル……!」

と思ったが、時すでに遅し。

「……あれっ……あのー、優也に何か用ですか?」

団体の一人が私に気付いて、声をかけてきた。

「え、いや、あの……」

「あっ、もしかして、優也のカノジョさん?」

「うわ、ちょーキレイ……やるねー」

勝手に話をすすめていく彼ら。

早くとめなくては！

「あの、私は……」

「……………何やってんの？」

背後から聞こえてきたのは、昨夜聞いた彼の声。

レッスンが終わり、ドアを開けた彼が、ドアの前でたまっている私たちを見回した。

「おー、優也！今から飯食いに行くから誘いにきたけど、お前カノジヨ来てんなら、いーや！」

「だから、私は……」

「カノジヨ？」

不思議そうな顔をした彼が、私のほうにゆっくり顔を向けた。

「えっ、香帆さん!？」

「なに、カノジヨじゃねーの？」

「ばか。昨日ケータイ拾ってもらったんだよ」

なんかこの状況だと、私が彼に一目ボレして大学まで押しかけたみたいじゃん。

「……………」

「あ、そっぴや昨日の天気予報、はずれちゃいましたもんね。わざわざ大学まで来てくれたんですか？」

「た、たまたまよ。たまたまこっちに用が……………」

嘘モロバレだ。

昔から嘘が苦手な私に、彼は温かい笑顔をむけた。

「よかつたら、昼ご飯一緒にどうですか？どうって言うても、学内で食べるだけですけど」

「……………」

就職してから、一人で食べることに慣れていた。

しかし誘ってくれた手前、断れない。

「いよいよ」

彼と友達に囲まれ、外に出た。

覗くだけのつもりだったのに、帰れなくなってしまった。

## #10 バゲット

「すみません、学内で。でもこのバゲット、すごいいいんですよ」

バゲットを買い、みんなでテラスに座る。

昨日の彼とは別人のように、完全に普通の音大生になっていた。

「優也、早く紹介しろよ」

「わーったよ。えー……千崎優也です」

「知ってる」

「だっせー（笑）」

「うっせ。えー、こちら、黒沢香帆さん」

軽く会釈をすると、向かい側に座る友達が拍手をする。

まさに新学期の自己紹介。若いなあ……

「あとは……お前ら、自分でやれ」

「ひどー。久住遙です！優也の幼なじみでー、ピアノ科3年」

セミロングの、明るそうな女の子が立ち上がる。

「何で立ち上がったよ」

「いーじゃん、はい、次」

久住さんに促され、茶髪の今風な青年が立つ。

「松方大悟です。ピアノ科のエース！よろしく！」

「誰がエースよ。すみません、ただのバカで」

どうやら彼が、グループのムードメーカーらしい。

「指揮科の矢野圭佑です。よろしく」

黒淵メガネの真面目そうな男の子が、軽く会釈する。

「で、管弦楽科バイオリン専攻の斎藤泉です。けいちゃんのカノジヨです！」

最後に照れながら立ったのが、ロングヘアのお嬢様ぽい子。

「……………黒沢です。…よろしく」

若い彼らのパワーに気落ちしそうになりながら、相変わらず苗字だけ言う。

「香帆さんだよ。すっげーかわいい名前だよなあ？」

私が名前を言いにくかったのに、気を使ってくれたのだろうか。

「えっ、香帆さん?! すっごく素敵ですね! 『香帆さん』って呼んでいいですか?」

久住さんが目を輝かせて言う。

大学生に気を使ってもらうなんて、私もまだまだだなあ。

「……………」  
「ありがとう」

消え入りそうな声で呟いた私に、彼は温かい微笑みをくれた。

生ハムを挟んだバゲットは、少ししょっぱかった。

## # 1 1 夜道

それからというもの、私は会社が終わったら週4日くらいの頻度でバーに通い、彼に愚痴を聞いてもらったりしていた。

前に会った大学の友達は来ないのか、と聞くと、

「実はバイトしてること、あいつらに言っただけでなくて」

と、悪戯っぽい笑顔で言った。

バイトなら他にいくらでもあるだろうに、あえて忙しい夜の仕事を選んだのは何故か。

ずっと気になってきたが、まだ聞けないままだった。

友達にも黙ったまま、音大生なのに練習時間を削って働く理由は何なのか。

彼の口調から、それが半端な理由ではないことくらい、すぐわかる。

私はあえてバイトの話はあまりせず、ひたすらたわいもない話で笑っていた。

「香帆さん、今度の土日って空いてます?」

いつものように閉店まで話し込み、一緒に店を出るとき、ふいに聞かれた。

「空いてる………どうして?」

「あ、前話した学祭があるんです。チケットあるんですけど、音大の学祭って誰誘ったらいいか、わかんなくて」

また出た。

あの少年みたいな、幼い笑顔。

「……………行く。ピアノ弾くんでしょう？」

「マジっすか?! やった、じゃあこれ、チケット。2枚渡しておきますね!」

そう言って、私に白い楽譜柄のチケットを差し出した。

「誰か行きたい人がいたら、どうぞ。使わなくても結構ですから。ただ、誰かいたほうが退屈しないかなあ」と……」

「ん、じゃあ誰か誘うかも」

夜道を歩き出す。

それからお互い、黙ったまま歩いていた。

沈黙に耐え切れず話しかけようとしたが、自分から話し出す話題がないのに気付き、あきらめて歩き続けた。

彼と別れる駅間近になって、ずっと無言だった彼が、突然口を開いた。

「……………でも」

「え？」

「……………彼氏は、呼ばないでくださいね」

「へっ？」

「じゃっ！」

私の聞き返しを遮るように短く言葉を切ると、駅の雑踏に紛れていた。

遠くに走り去る彼は、耳まで真っ赤になっていた。

私はほんのりほてった顔を冷たい手で包み、自分に言い聞かせた。

「年下の、しかも学生にときめいてどうする」

しかし、いつまでたっても顔は、赤いままだった。

## # 12 学園祭

学祭当日。

会社の有給休暇をとって、再び青葉ヶ丘音大に向かう。

わざわざ有給とったのは、少しでもあの忌ま忌ましい派遣社員を見ないで済むのなら、とあえて平日の金曜日に行くためである。

前に来たときより人で賑わっていて、自分の大学時代の学園祭を思い出す。

もともと、学祭にはあまり真剣に取り組んでもなかったし、少し顔を出すくらいでほとんど参加していないに等しかったけど。

「あれ、香帆さん？」

ぽつと歩いていた私の背後から、明るい声がした。

「あ……えーっと、優也くんの……」

「幼なじみの、久住遥です！香帆さんも見に来られたんですか？」

そうそう、たしか久住さんだった。相変わらず明るい子だ。

「見………って、何を？」

「《千崎優也（ピアノ科首席）と学内オーケストラ夢の共演・ピアノ協奏曲をあなたに》です！」

と言って、おもむろにチラシを取り出した。

この学祭でも目玉イベントらしく、カラープリントの黒いチラシには、ピアノを弾く燕尾服の優也と、ゴージャスな楽器をかまえたオーケストラの写真が、大々的に載せられていた。

「首席なの？」

「はい。まだ3年ですけど、彼がトップなんです」

よほど嬉しいのだろう、頬を緩ませて笑っている。

「見にくって言っちゃったし、行くつもりだけど……」

彼女はおそらく、彼のことが好きなんだろう。

若いつていいなあ…と、いやに年おいた発言を心の中で呟く。

「じゃ、行きましょう！もうすぐ始まつちやいますよ」

半ば強引に引つ張られながら、彼のために必死な彼女に、少し苦笑した。

### # 13 涙

「こちらです。大悟、もう始まつちやう?」

「あ、うん。あと2分で扉しめるとこだった。……………あれ、そちらの超ビューティフルな彼女は、優也のカノジョの香帆さん!」

受付でパンフレットを配布している大悟くんは、相変わらずテンションが高い。

とはいえ、久住さんの手前、いつのまにかカノジョ認定されてる誤解を解かなくては。

「だ、だから私、優也くんとは……………」

「まあまあ。もう開演ですから、お入り下さい」

私の必死のアピールはあっけなく消され、促されて会場に入った。

「……………ゴメン、ね」

隣に座った彼女に、小さく謝る。

「な、なんでですか？こつちこそ、すみません。大悟のバカが……」

徐々に暗くなる会場の中で、久住さんの表情を読み取るのは不可能になった。

オーケストラのチューニングのあと、アナウンスが入ってステージが明るくなる。

「あのオケって、やっぱり上手な人ばつかなの？」

「まあ、そうですね。各学科から優秀な学生が集められてできてます」

よかった、あまり気にしてないみたい。怒っている風には聞こえなかった。

拍手が鳴り出した。

つられて叩いていると、スポットライトで追われながら、指揮者と燕尾服の優也が出てきた。

割れるような拍手が徐々に止み、指揮者がタクトを振り上げた。

力強く、かつ繊細なピアノの音が、静まり返った会場に響き渡る。

徐々に大きくなるピアノの波に引き込まれ、会場を包み込む。

オーケストラの多彩な音色が重なり、彼の繊細で大胆なピアノと溶け合う。

しばらくしてピアノだけの、流れるような切なげな旋律が奏でられる。

ピアノと一体化したように弾き狂う彼は、いつも見ていた和やかな

彼とは別人だった。

気付けば曲は第三楽章も佳境に差し掛かり、鮮やかなピアノの旋律とオーケストラの華麗な音色が、会場全体を包み込んでいた。

息を呑んで見守っていた私の頬は、無意識のうちに濡れていた。

ライトにあたったステージ上の彼とこの暗い客席にいる私とが、全く違う世界にいるように感じた。

やがてピアノの細やかな音とオーケストラの悠々とした旋律で曲は終わり、余韻が会場に響き渡ると、会場からは割れるような拍手が起こった。

中には『千崎先輩!』という叫び声も混じっていた。

すぐに立ち上がれなかった私は久住さんに先に行ってもらい、しばらく会場で声を潜ませて、泣いた。

泣いた理由は、《感動》という言葉では表せないくらい、彼のピアノには胸を打つものがあったから。

もう一つは、いつも近くで温かく笑っていた彼が、なんとなく心を開けるようになっていた彼が、遠い存在に思えたから。

## #14 約束

《今日は素敵な演奏ありがとう。すごく感動しました！あんなに激しいピアノを聞いたの何年ぶりだろう……。とにかく、お疲れ様でした》

ありきたりな文面しか打てない自分に呆れる。

会場でひとしきり泣いたあと、帰る間際にメールを送る。

本当は会って話したいけど、なんとなく、会いづらい。

またうずくまりかけたそのとき。

「香帆さん、来てたんだ！」

突然頭の上から声がした。

耳慣れたこの低い声。

メールを送ったあとに会うなんて、恥ずかしすぎる。

「どうだった？」

最近彼は、だんだん敬語が崩れてきている。

だけど不思議と、嫌じゃない。

「……………すっごく……………感動、した」

無邪気に笑って、ちょっと照れながら、ありがと、と言った。

「ね、俺もここで休んでってもいいですか？」

「へ？」

「さっきから後輩とかに、追いかけて回されて。実は女の子、ちよっと苦手です…」

やっぱり大学でも人気なんだ、彼は。

確かにあんな演奏を聴いたあとだと、見る目が変わってしまっ。

「……バーテンダーなのに、苦手なの？」

「あのバーって入り組んだところにあるから、あんまり女性のお客さん来ないんですよ」

「その来ないバーに、私を呼び付けたくせに」

「すみません（笑）」

わざとキツイ口をきいた。

泣いたあとの目をみて、何も気付かなかったはずはないけど、黙っててくれた。

「……じゃあ、そろそろ帰るね」

長い、でも心地よい沈黙を破り、立ち上がる。

「送ります」

「大丈夫、まだ明るいから」

ホールを出て、明るい日差しの下に出ると、今まで静かだったのが嘘みたいに賑わっていた。

「……………あの……………」

「ん、なに？」

また優しく笑う。

なぜかつられて赤くなる私。

「……………弾いてほしい、曲があるの……………」

「うん、いいよ」

年甲斐もなく赤くなって、絞り出すように投げかけた言葉に返ってきたのは、あっけらかんとした軽い返事。

だいぶ年上の、しかも人にあんまり頼んだことのない私が、こんなことするなんて……

「へっ?」

「へっ、っ、曲でしょ」

「うん?」

「あ、じゃあ俺の家おいでよ」

「えっ……」

こんなにさらりと誘うなんて、最近の若者は……

「いやさ、でかいピアノのほづが、いいでしょ?」

あ、そーいうことね。

確かに、こんな純真無垢みたいな彼が、ソレ狙いで連れ込むなんて、ありえないか。

そっち方面しか考えないなんて、私って……

「ん？どした？」

下から覗き込むようにした優也と目が合い、あらためて赤面。

「な、なんでも……」

「ん。じゃあ、いつがいい？」

「い、いつでも……」

「じゃあ明日は？店も休みだし」

「わ、わかった。またメールする」

「はい。それじゃっ！」

彼と離れて、少し歩いてもう一度振り返ると、彼はそれに気付いてまた手を振った。

太陽の光が、彼の笑顔を優しく照らしていた。

## #15 カットソー

《今日の午後に行ってもいい?》

《了解です!じゃあバーの前まで来てもらえますか?迎えにいきます。楽譜は心配しないでくださいね じゃあまた!》

……結局行くことにした。

自分から言い出した手前、断るのもおかしいし、かといってメールを自ら率先してするのも、長年やってきた『できる女』な振る舞いを壊すようで恐ろしく、結局迷いながら次の朝を迎えた。

ベッドから手をのばして充電器からケータイを奪って開くと、新着メールが来ていた。

《朝早くにすみません。今日来ますか?来られるんだったら急いで部屋片付けるんで!》

相変わらず機転の回る奴だ。

私のこの妙なプライドを思って送ってくれているといたら、買いかぶりすぎだろうか。

返信をしてから朝食をとり、服を選びにクローゼットに向かう。

優也が一人暮らしか実家通いか分からないので、一応少し若く見えて上品なデザインのものを選ぶ。

黒いニットにロングスカート……これじゃあ参観日か。

茶色いワンピース……若すぎだよな。

ころころと鏡の前で服を合わせる私を、別の私が苦笑してみている。

『年下の大学生のために、こんなに悩んでいるなんて』

べつに下心なんてない。ただピアノを弾いてもらうだけなんだし！！

……自分で自分に言い訳。

若すぎず大人びすぎず、て、そんな服……ッ！

と、気付けば約束の時間の1時間前。

普段から仕事の資料ばかりじゃなくて、雑誌も読んでおくべきだった。

「……………これ！」

奥深くから引っ張りだしてきたのは、オフホワイトのファーつきカ  
ットソー。

リボンが胸元にあって、全体がぼわぼわしている。

去年、あまりに派遣のこらの仕事出来なさにキレて、むしゃくしゃしながら衝動買いした一品。

「……………かわいすぎかなあ……………」

鏡に合わせてみると、意外に幼くない。

普段なら絶対に着ないだろうジャンル。

でも……………

カットソーの開いた首元からは鎖骨が綺麗に見えてて、おとなしめのスカートと合わせると、意外にも……………

「……………いいかも」

髪はめずらしくハーフアップにし、ゆるく巻いてメイクにとりかかる。

上品に見えるように整え、足元はこれまた衝動買いの冬物パンプス。

アイボリーの外出用ロングコートを羽織り、ラメ入りマフラーをゆるく巻いて、玄関の全身鏡に映す。

「……………変…?」

こんな格好、会社の人には見せられないなあ。

年甲斐もなく、年下のためにこんなに着飾るなんて……………

鍵をしめ、肌寒い日差しの下を、ゆっくりと歩き出した。

# 16 BMW

小走りでバーに向かう。

いつも深夜に歩く道を昼間に歩くと、全く違う雰囲気だ。

明るい日中に見る《moderato》は、いつもの隠れ家的な  
雰囲気はなくて、なんとなくこじんまりとしたものだった。

「香帆さん!」

聞き慣れた声のほうを向いた。

「……………BMW!? な、んでそんな……………」

颯爽と現れ、車から降りた優也の後ろには、THE高級車・白いBMWが停まっていた。

大学生のくせに、妙に馴染んでいる優もおかしいが……。

「ん、ちょっと見栄はつてみた（笑）」

いや、笑い事じゃないだろう……

「そんな酸欠金魚みたいな顔しないで。意外に安いから」

見え見えな気遣いが、さらに自分の平凡さを引き立たせる。

「……………」

「はい、とりあえず乗ってください」

さりげなく助手席のほうまで歩き、すつとドアを開ける。

絶対フツの音大生じゃない。

確信した。

恐る恐る助手席に座ると、優也は外からドアを閉めて運転席に座った。

思わずまじまじと顔を見てしまう。

「……………そんな見ないで、照れる……………」

前を見ながら顔を赤くする。

「今日、なんか雰囲気違いますね」

「わ、若すぎたかなっ……………こんな格好、普段しないから緊張して……………」

慌てて弁解。

舌を噛む勢いで、まくし立てる。

「全然そんなことないです。……………すっごくかわいい、です」

「へ、あ、……………ありがとう」

生まれて初めてのBMWの中で、生まれて初めて息が止まりそうなほど緊張する沈黙を経験した。

「ここです。先に中までお連れしますね」

「う、うん……………」

乗ったときと同じようにドアを開けてもらい、そっと降り立ったその先は……………

「……………ホテル……………」

やたら規則正しくかつ現代風に整備された庭と、ホテルかと見間違  
うような立派なエントランス。

優雅なクラシックが流れ、落ち着いた照明で、一度は住んでみたい  
マンションランキングというものがあるなら、間違いなく一位独占  
の代物だ。

「……………」

「ごめん、車停めてくるんで、ここで待っていてください」

「はっ、はい！」

私の驚きを分かっているのかいないのか、微笑んでから走っていっ  
た。

「……………はあ……………」

もしかして、すごい人…？最近の音大生って、こんなものなのか？  
？

## #17 至福の午後

「どつぞ〜」

通してもらった部屋は、予想を裏切らない素晴らしい部屋だった。

部屋の真ん中にはグランドピアノと、楽譜が詰め込まれた大きい本棚が置かれている。

棚にはオーケストラのDVDやLD、CDが所狭しと並び、指揮棒が数本たてられている。

よく見ると、楽譜棚は6割方スコア（総譜）で占められている。

どちらかというところ、ピアノ科の学生というより…指揮者志望の人の部屋……………？

「ここ座ってください。コーヒーか紅茶、どっちがいいですか？」

キッチンから楽しげな声がかきこえてくる。

慌てて振り向き、なるべく不自然にならないように声をあげた。

「紅茶くれる？」

目の前のガラス製のローテーブルに置かれた紅茶は、高価そうな力  
ツプの中で、美味しそうに湯気をたてていた。

一口だけ口に含んだ瞬間、ほんのり甘い味が口いっぱいに広がる。

「おいしい」

「でしょ？これ、大学の友達のお土産。イギリス本場の茶葉だから、  
すっげー旨くて、絶対香帆さん気に入ると思ったんだ」

てっきり、優也が取り寄せたのかと思った。

「で、何の曲？」

完全に紅茶に酔ってた私は、当初の目的を忘れ去っていた。

「あ、うん。……モーツァルトなんだけど……ピアノソナタの、  
第8番」

あらためて口になると、なんか自分がとても恥ずかしいお願いをしてる気がして、妙に早口になる。

「こんなの、音大生に頼むなんて、間違ってるかもしれないけど……」

「ううん。前に弾いたことあるけど、すごくいい曲だね」

そう言うと、カップを置いて立ち上がり、楽譜の入った本棚に向かう。

大量の楽譜の背表紙を指でなぞり、一冊の譜面を見つけた。

「モーツァルト作曲。ピアノソナタ第8番KV310……あってる？」

「う、うん、たしかそんなカンジ……」

「俺、第二楽章が好きなんだ」

「私も！」

ピアノの蓋を開け、楽譜を開く。

大量の書き込みが現れる。

かなり練習してるんだ……。

「……やべ。演奏会より緊張する（笑）」

照れ笑いを浮かべながらピアノの方を向くと、さっと真剣な目になった。

そして、ゆっくりと奏で出す。

ゆったりとした旋律で、どこか切なげに始まり、優しげに部屋に響き渡る。

軽やかで、キラキラしていて、昼下がりの暖かい光が差し込んだこの空間に、ものすごく合っていた。

優也の真剣な瞳と、優しい音色を奏でる大きな手を見ていると、妙に温かい気持ちになった。

やがて曲調は切なく暗くなり、急に気持ちざわめき出す。

しかしすぐに復調し、また軽やかに流れだす。

風に揺れるカーテンの影が床に映し出され、ゆったりとした雰囲気を作りだす。

私は、ゆっくり瞼を閉じ、しばらくこの至福の空間に、身を委ねることにした。

# 18 背中

静かに弾き切った優也は、ゆっくり手を下ろして振り向いた。

「……………どうでした？」

演奏はあんなに堂々としてたくせに、少し不安げな顔つきで私を見る。

立ち上がり、ピアノのほうへ歩み寄る。

「……………すごく、感情移入した。……………感動した」

「小泉かつ！（笑）」

茶化す中に、安堵の表情が垣間見えた。

「……………何でこの曲？」

「……………内緒」

「えっっ！何だよ」（笑）

さっきまでの真剣な瞳は消え、またいつもの温かい目で笑う。

安心する。

「あ、じゃあついでに、今の課題曲聞いてもらえますか？人に聞いてもらえて、先生に言われてるから」

「？もちろん。…私でよければ」

「ありがとう」

本棚まで行き、さっと何冊かの楽譜を取り出す。

「じゃあ、まずは技術のやつ」

手をピアノに叩き下ろした瞬間から、私は呆気にとられた。

さっきとは打って変わって、激しい音の波。

鍵盤の上を指が踊り、そして生み出されるうねりが、部屋を覆う。

あっという間に弾き終わった。

「……………」

すすすぎる。これが本当に、学生の課題曲なんだろうか。

「……………何て曲？」

「え？えー、ショパンのエチュードOp.10-4だね」

ありえない。

素人の私でもわかる。

ただの音大生じゃない。

何でこんな彼が、プロじゃないんだろっ……

「まだ、全然なんだけど……。俺、速いの苦手で」

「他にもあるの？」

「……聞かされる出来じゃないけど、あとは……」

それから、私は優也が生み出すピアノの波に、しばらく酔っていた。

ラヴェルの《水の戯れ》

シューベルトの《ピアノソナタ第16番D・845》

彼の表現力に、驚いた。

技術はもちろん、様々な曲調を捉え、感じたままに表現する能力。

あの学園祭のときと同じように、急に彼が遠い人に思えた。

衝動的に、彼の背中に顔を埋める。

「か、香帆さん？」

演奏が止まり、慌てた優也が振り向いて顔を覗き込もうとした。

「ど、どうしたんですか？何か嫌なことでも……」

「……どこにも、行かないで……」

「え？」

「遠くに、行かないで……」

思ったことがそのまま口から零れ落ちる。

こんな弱いところ、他人に見せるなんて……

そう思っても、言葉はとめどなく出てくる。

「……行かない。……ずっと近くにいます。……だから、好きなだけいてください」

彼の鼓動が速くなったのがわかった。

突然こんなこと言うなんて、どうかしてる。

だけど、こんな私を優しく受け止めてくれる優也。

そんな彼の背中が、妙に心地よかった。

#19 特別な日（前書き）

今回は、優也視点です。

## #19 特別な日

十優也 *side t*

今日、初めて香帆さんが俺の家に来ることになった。

学園祭の日、彼女が泣いてたのを、実は知っていた。

だけど、重い雰囲気になったら困るから、あえて聞かなかった。

香帆さんが来るのは午後。

俺は必死で、部屋を片付ける。

元々ピアノくらいしかない部屋だけど、床に散らばった楽譜を棚に戻すくらいはしておく。

掃除機をかけて、さらにクイックルワイパーで磨く。

クイックルワイパーは昔から愛用していて、買い置きが大量にある。

なんか格好悪いから誰にも言わないけど。

ツヤツヤになった部屋に鍵をかけ、車を出す。

白いBMWは、免許をとったときに親に買ってもらった。

俺は国産車でいいって言ったけど、とりあえず買っておけって言われたものだ。

味気なかった車内は、俺好みにデザインされている。

部屋より車の掃除の頻度の方が多いほど、わりと気に入っている。

クラシックのCDをかけると、車内全体がホールみたいになるのも、

気に入ってるポイント。

店の前に佇む、私服の彼女。

今日はちょっと、可愛いかんじ。

いつもはスーツとかだから、少しときめいた。

大悟が『女はギャップだ』って言う理由、何となくわかった気がする。

香帆さんを車に乗せ、エンジンをかける。

香帆さんの好きそうなクラシックのCDを、何気ないふりしてかける。

正直、緊張しすぎて、手とか汗ばんでる。

そのうえ、香帆さんがやたら見てくるのが視界に入って、緊張状態はMAX。

て、意識しすぎか？俺。

実はそんな見てなかったりして。

勝手に妄想を繰り広げているうちに、マンションについた。

立ち止まっている香帆さんをロビーに待たせ、駐車場に走らせる。

「……………だあゝ…落ち着けー…」

火照る顔に、冷たい手を被せる。

今日のメインはピアノなんだから。

俺が緊張してどうする。

香帆さんに、格好悪い演奏は聴いてほしくない。

とにかく、落ち着こう。

#20 昼下がりの一時(前書き)

今回も引き続き優也視点です。

## #20 昼下がりの一時

十優也 *side t*

部屋に案内し、いそいそとキッチンに向かう。

こないだイギリスに行っていたピアノ科の友達に、旨い紅茶の茶葉をもらった。

いつもは俺しか飲まないやつだけど、あれなら香帆さんも気に入るかな。

紅茶をゆっくり差し出すと、香帆さんはおいしそうに飲んでくれた。

やっぱり、これ出してよかった。

「で、何の曲？」

本当はもっと彼女を見ていたかったけど、そういうわけにもいかない。

香帆さんは、俺のピアノを聴きに来たんだから。

香帆さんが言った曲は、音楽高校時代に弾いた。

あの時は課題として出されて、正直嫌な思い出しかない。

けど、香帆さんが好きって聞いた瞬間、俺にはこの曲がものすごく輝いてみえた。

ゲンキンだなあ、俺（笑）

あのと先生に言われて無理矢理つくって弾いてた表現も、香帆さんのためを思うと自然に体中から溢れてくる。

弾き終わり、香帆さんが褒めてくれたのに調子にのり、さらに今の課題曲まで弾いた。

ショパンもラヴェルもシューベルトも、どれも楽しくてしょうがない。

もしかしたら、香帆さんが聴いてくれたら、俺の技量も上がるかな。

なんて調子のいいことを思っていると、突然香帆さんが、俺の背中にもたれ掛かってきた。

俺の体内メトロノームは一気に二倍の速さで刻み、俺の体温バロメーターも目盛りを大幅に振り切った。

「か、香帆さん？」

突然のことに、俺は少し慌てる。

しかしそんな俺とは対照的に、香帆さんのか細い肩は細かく震えている。

「……どこにも、行かないで……」

「え？」

「遠くに、行かないで……」

消え入りそうに……しかしはっきりとそう聞こえた。

いつもクールで大人な香帆さんが、こんなこと言うなんて。

よくわからないけど、絶対に彼女から離れてはいけない気がした。

震える彼女を見て、不謹慎にもときめいてしまった。

大人の男ならこういつとき、どうするんだろう。

こんな香帆さんを見ても、ただ声をかけることしかできない自分が情けない。

「……………行かない」

香帆さんが望まないかぎり、それはありえない。

そう強く思った。

## #21 変化(前書き)

香帆視点に戻ります。

## #21 変化

あの日からも私と彼の距離は相変わらずで、私のあの妙な行動に対しても、彼は何も聞いてこなかった。

そんな彼の優しさは、痛いほどよくわかってる。

だけど、まだ話す勇気がない。

…重い雰囲気は、もうあの頃だけで十分だ……。

相変わらず私は会社帰りに《moderato》へ行って、閉店までしゃべって帰る。

そんな夜な一時が楽しみで、私の仕事だけに取りついた生活が、少しずつ変わっていった。

「黒沢さん！すみませ〜ん、私頑張ったんですけどお、入力したデータが消えちゃって〜」

「あ、そう。バックアップは？」

「とっただと思ってたんですけどお、とれてなくて〜…」

「そう。じゃあ私やつとくから、これの整理を船越さんに聞いてやってて〜」

派遣社員がありえないミスをしたも、すぐに怒らなくなった。

前の私なら、

『バックアップもとれないの？男をオトす方法は知ってるのに、文字を入力する方法は知らないのね』

とか嫌みを言ってたのに。

もしかして、彼の存在は私にとって、プラスなのかも。

……そんなこと、言わないけど。

とにかく、社内でも全てが円滑に進んでいる気がする。

さっきも派遣のことが、

「最近黒沢さん、刺々しくないよね〜」

「男でもできたんじゃない?」

「絶対ケツコン前提だよね〜。結構な年だし」

て話しているのを耳にした。

当たってないけど、外れてもないかな。

優也の存在が私を穏やかにしてるのは、間違いじゃない。

たかだか大学生の男に、こんなに影響されるなんて。

自分で自分に驚くけど、べつにそんなに嫌じゃない。

そう思う自分にもまた驚く。

こないだ見た、スコアや指揮法の本の数々。

正直気になるけど、あっちが言ってくるまで待つ。

優也も言ってこなかったんだから、私だけ聞くのもフェアじゃない。

「黒沢くん、ちょっと」

派遣のコのミスをカバーし、給湯室でコーヒーを入れて飲んでいると、上司の児島さんが手招きした。

「何ですか？またミスですか」

「違う違う。君さ、クラシックとか興味ある？」

冬なのに脂ぎった顔を近づけてきた瞬間、反射的に後ずさりした。

「まあ、それなりに……」

優也の影響だけ。

「おお、ならちよつどよかった」

「え、まさか私が部長と行くんですか？」

「なんでそんな顔するんだよ」

絶対に嫌だ。

「じゃなくて、こないだ取引先の人に、Orchestraのticketもらったんだ。でも僕あんまり詳しくないから、よかったら貰ってくれない？」

ところどころ英語の発音を使うということは、外人に買ったという意味だ。

つまり、自分は英語ができると、暗に主張したいのだ。

わかりやすすぎる部長の自己アピールを無視し、*t i c k e t*はありがたく頂くことにした。

……こないだのお礼に、誘ってみようかな…。

## #22 チケット

しかし……………どう誘おう。

寒空の下、歩き慣れた道を行きながら、考える。

鞆には、部長に貰ったチケットが2枚。

今週末の夜、いつもより客足が少ない土曜日。

私用がなければ、来れそうな条件。

けど、私から誘うなんて、今までそんなことしたことなくて。

でもお礼はしたいと思ってたし。

「……………どうしよう」

「あ、香帆さん！こんばんは」

相変わらず客は少ない。

今日は、会社帰りのサラリーマンが二人。

でも大体11時には帰ってしまうから、1時間は優也と二人でいることになる。

「香帆さん、今日は何にしますか？」

「えー……ちよ、ちょっと仕事したいから、あとでいい？隅っこにいるから」

「うわ〜大変ですね…。じゃあ、お水をお持ちしますね」

本当はそんなに量はないんだけど、チケットを渡す方法を思いつくまで、一人でいることにした。

そばに差し出されたトレーには、グラスいっぱいの水と、小さいチョコレートが3つ置かれていた。

「チョコ？」

「今流行りの、なんとか糖が入ったやつです。頭使うときにいいみたいだから」

つくづく気配り上手な奴。

嘘をついてるわけじゃないが、少し罪悪感を感じる。

しかし自分で言い出した手前、しないわけにはいかない。

仕方なく資料を広げる。

資料は、今度の取引先との会議で必要なリストなのだが……

なんと、ドイツ語で書かれているのだ。

明後日までに日本語に訳さなければならぬのだが、これが大変で。

大学時代に留学していたから英語はできるとして、ドイツ語なんかさわったこともない。

しかしうちの部署のドイツ語ができる人が、ちょうどドイツに出張に行っていて、やむを得ず受け持つことにしたのだが……

全く進まない。

頭を抱えながら独和辞書にむかっていると、優也がカウンターから顔を覗かせた。

「進んでる？」

いつのまにかサラリーマンたちは帰っていて、優也と二人きりにな

っていた。

「あ、まあ……」

「ドイツ語？」

「うん……私、英語しかできないのに、なんかこの仕事こなすことになっちゃって……」

興味深そうにリストを見る優也。

まだ膨大な量が残っていることに、呆れているのだろうか。

「……俺、ドイツ語できるよ」

……え？

「え、うそ！」

「ほんと。昔10年くらいドイツに住んでたんだ」

カ、カッコイイ…。

そんな人が、こんな近くにいたなんて……………。

「俺が訳すから、それ書いてっつて。そしたら速いよ」

「けど……………なんか悪いし」

「いや、いいから。じゃあまぢ……………」

優也が手伝ってくれてから、スピードは格段に上がった。

12時を過ぎる頃には全て訳し終わり、最後のホツチキス留めに差し掛かっていた。

「ありがとう……………助かった」

「いえ、俺も久しぶりにドイツ語見て、懐かしかったし」

……

……チケット！

今渡さないと！

「あの……ここ、今週末あいてる？」

「うん、まあ……なんで？」

「じ、じゃあブルームスは？」

「へ、す、好きですけど……」

「じゃあワグナーは？ラフマニノフは？」

「ちょ、どつしたんですか？」

「これ……っ」

勢いあまって、カウンターのの上にたたき付けた。

「い、行かない？今日とこないだのお礼もかねて……」

「え、でも悪いんじゃない……」

「上司に貰ったんだけど、他に誘う人もいないし……」

半分嘘。てか、最初から優也を誘う気だったし。

「……本当に、いいんですか？」

「うん」

「やった、じゃあありがたく行かせていただきます」

成功！

「うわ〜……ブライじゃないですか……わ、マイスタだっ……」

すごく嬉しそうに、チケットを眺めている。

そんな彼を見て、ほっと胸を撫で下ろした。

### #23 ドイツ語(前書き)

今回も優也視点になります。これから度々優也からの視点で書くことがありますが、その際は + 優也 side + という書き方をするので、たぶん分かると思うのですが……。 分かりにくかったら教えてください！

## #23 ドイツ語

十優也 s i d e t

香帆さんが店に来るようになってから、バイトするのがとても楽しくなった。

ピアノの練習時間が短くなっても、香帆さんというほうがよかった。

もともと、短い分集中して練習するから、こないだの実技試験ではトップだった。

やっぱり、香帆さんという事で、俺自身が成長できるんだろうな。

そんなことを思いながら、その日も香帆さんのことを見つめていた。

サラリーマンが帰ってから、俺は香帆さんと二人きりになった。

慣れたと思っけていても、やっぱり緊張してしまうこの状況。

今日は香帆さんは仕事をしていて、何やらぶつぶつ言いながらペンを走らせていた。

覗いてみると、ドイツ語のリストを必死で訳していた。

悪戦苦闘する彼女は正直ものすごく可愛くみえたが、本人はそれどころじゃないみたいなので、口を出してみる。

実は生まれてから10年くらいドイツに住んでいたことがある。

だからドイツ語はまあ、わりと覚えているはず。

訳を手伝い終わると12時をまわっていた。

グラスの片付けをしていると、香帆さんがおもむろに何かをたたき付けた。

「チケット？」

どうやら香帆さんが、俺を誘ってくれているらしい。

そんなの、誰が断るんですか！

「…じゃあ、ありがたく行かせていただきます」

そう言うと、彼女はほっとしたように微笑んだ。

反則だろ、その顔……。

慌ててチケットに目を移す。

ブラームス交響曲第1番

ワーグナーの《ニルンベルクのマイスタージンガー第1幕への前奏曲》

ラフマニノフの《ピアノ協奏曲第4番》

俺好みの曲目だ。

最近オーケストラのコンサートに行つてなくて、ずっと行きたいと思つていた。

まさかこんな形で、しかも香帆さんとなんて………今日はツイてる。

## #24 ギャップ

チケット持った。

服とメイクは薄め。

飲んでも大丈夫なように、お金も持った。

何度もバッグの中を確認して、鏡の前でターンして、そして意気揚々と出発した。

……机の上に寂しく置かれたままの鍵の前で、静かにオートロックの扉は閉まっていった……。

BMWに迎えられ、コンサート会場に向かう。

一応寝ないように、予習じゃないけど、CDは聴いてきた。

個人的にはワーグナーの曲が好きだ。

某ホテルのディナーだかランチだかのCMで、流れていた気がする。

ブラームスは重厚なかんじ。

車の中で、優也はこのブラームス交響曲が好きだと言っていた。

クラシックの話をする優也の顔はキラキラしていて、本当に音楽が好きなんだなあ〜と微笑ましく見ていた。

コンサートの前に、優也が予約してくれていたイタリアンレストランで食事をしようということになって、案内されるがままに店へ向かう。

「1」…こんなお店、高いんじゃない？」

案内されたのは、落ち着いた雰囲気でクラシック音楽なんか流れてたりする、いかにも高そうなレストラン。

慌てて財布の中身を確認する私に、優也は笑いかけながら言った。

「大丈夫ですよ、俺が払いますから」

「でも、私のほうが年上だし……」

「…じゃあ、俺に無理矢理つれてこられたことにして。……ちょっと、イイとこ見せたくて（笑）」

不覚にも、照れた。

私が諦めておとなしくなると、彼は満足そうに微笑んだ。

食事は今まで食べた中で一番おいしかった。

何でこんな店知ってるの？、と聞くと、

デート雑誌でめちゃくちゃ調べちゃいました、とはにかんだように笑った。

レストランを出て、コンサートの会場に向かう。

買ったチケットの指定席はかなり良い場所で、優也はものすごく嬉しそうに座った。

ブザーが鳴り、客席のライトがしだいに落ちていく……………。

コンサートは素晴らしかった。

曲目も派手で、聞いていて飽きない演奏だった。

ラフマニノフのピアノ協奏曲のとき優せに、この曲は弾けるの？、と聞くよ、

「練習中です」

と笑って言った。

その顔が、いつもの余裕のある優しい微笑みじゃなく、少しバツが悪そうな子供っぽい顔で、そのギャップにまたしてもやられた。

今日はいつもにもまして、いろんな表情にくるくる変わるなあ……。。

## #25 重大ミス

「え……あれ……鍵……」

優也にマンションの下まで送ってもらい、もう少しでなんとかノーマスで通せる、といったところで、重大なミスに気がついた。

消えかかっている街灯の下で、優也に見守られながら必死でバッグをゴソゴソする私。

しかし、バッグの中から鍵が現れることはない。

「うそー…鍵忘れてきた？もう管理人さん寝てるのに………」

顔は真っ青だ。

深夜の1時すぎ。

初老の管理人は、窓口を10時には閉めてしまう。

今頃彼は、完全に夢の中だろう。

10時まで開いてるのだから、年を考えれば頑張っているほうだ。

ボロいマンションのくせにオートロックだけなぜか完備。

管理人の親切心も、深夜に佇む鍵のない女にとっては、かえって仇になる。

「どうしよ……明日は仕事ないけど………ゆ、優也くん、ホテル代貸してくれませんか……？」

怖ず怖ずと、心配そうに私を見つめる学生に言い出す。

「お願いしますー！ちゃんと月曜日には返すから！」

「もちろんですけど……あ………あの……俺んち、よかったら来ますか？」

.....。

.....え？

.....ええっ?!

「いや、べつに他意はなくて、ほんとにっ.....」

慌てて弁解する優也。

車の中での雄弁さは何だったのか、耳まで赤くなっている。

「もちろん、嫌ならちゃんとお金貸しますし.....っ」

「.....じゃあ、あの、1日だけ、お泊りさせてください.....」

そう言つと、彼は真つ赤な顔で、

「はい！」

と笑つた。

#26 写真

……私、なんかすごい大胆なことしてない？

鍵を忘れたといえど、男の家に泊まりにくるなんて……。

しかも、彼氏でもなんでもない、学生の家……。

こんなこと、派遣のコらにバレでもしたら大変だ。

「あ……ど、どつぞ……」

「ど、どつぞ……」

優也くんも緊張しているのか、動きが少しぎこちない。

「あ、こ、紅茶でも飲みますか？こないだの茶葉がまだ残ってて」

「あ、うん、いただきます……」

部屋に来たものの手持ち無沙汰で、仕方なくソファーに軽く腰掛け  
る。

遠慮しているとき、なぜ人は腰掛ける部分が少なくなるんだろう。

案の定、ソファーからずり落ちた。

「だ、大丈夫ですかっ?」

「う、うん。ごめん……」

恥ずかしすぎて、どこを見ていいかわからなくなる。

「……………ぶっ」

え？

「あ、すみません！なんか、お互い緊張しすぎですよね。ほんとに、ホテルだと思ってくつろいでください」

「でも、そんなの……」

無理、と言いかけてやめた。

なんか、年甲斐もなく照れている気がして、急に恥ずかしくなった。

紅茶を飲みながら、たわいもない話をしていると、ふと写真立てが目に入った。

「あ、写真………見てもいい？」

「あ、はい。なんか恥ずかしいですけど……（笑）」

手にとると、幼い優也と金髪の少女が一緒にピアノを弾いている姿が写っていた。

「わ、すごい。これが、例のドイツのときの？」

「あ、いえ、それはたぶん、ジュリアードのときのかな？」

ジュリアード……ジュリアード音楽院？！

「えっ？うそー！」

「こっちがドイツのです」

指さされたもう一枚の写真には、ヴァイオリンを弾く女性とデュオをしているさらに幼い優也が写っている。

「え、え？」

「生まれてから10年は、ドイツにいたんです。でも10才のときに出たコンクールで、そのとき見に来てたジュリアードの先生に誘われて、N・Yにいたんです」

恥ずかしげもなく淡々と話す優也。

だけど……………

「そ、それって、すごいことなんじゃ…………？」

「でもジュリアードは2年で退学したんですよ。なんかアメリカが俺に合わなくて（笑）。それからは日本です」

そんなすごいんですよ、と優也は付け加えたが、びっくりして声も出なかった。

急に、優也に後光がさしたかんじ。

「もう遅いですし、寝ましょう！香帆さんはベッド使ってください。俺こっちで寝るんで」

「へっ、それはダメよ。いくらなんでも悪い……………」

「もー、ホテルみたいに思ってくださいってば。こっち、案内しま

す  
「

サプライズ続きで、どっやら寝つけそうにない。

## #27 家族写真

十優也 side t

香帆さんを家に呼んだ。

べつに、下心なんて全くない！

……とは言い切れない俺（笑）

香帆さんにバレたら、殴られそうだな（笑）

香帆さんが寝静まるまで、俺の緊張は極限状態だった。

香帆さんを無理矢理寝室につれていき、ドアを閉めた。

そうしないと、おかしくなりそうだった。

物音がしていた寝室は、しばらくして何も聞こえなくなった。

やっぱり疲れたのかな。

ピアノの蓋をあけ、鍵盤をひとつ押してみる。

ポーン、という耳慣れた音を聞いて、少し緊張がとける。

ちなみにこの部屋は防音設備が整ってるから、夜中に音を出しても大丈夫なのだ。

ふと、写真たてに目がいく。

ドイツで生まれた俺は、10才でジュリアードに入学した。

だから、日本語よりドイツ語のほうが多く覚えたし、英語も少し話せる。

音楽をやる上ではすごく役立つが、これが原因で、帰国直後はずいぶんカルチャーショックで悩んだものだ。

帰国直後は、

二度と音楽はやらない

とあんなに誓っていたのに、あの事件があつて以来、やっぱり音楽に進むことに決めた。

おもむろに、棚から1枚の写真を取り出す。

最後に家族写真を撮ったのは、たしか高校に上がる前だ。

父親の仕事の関係でつれていかれた場で、撮ったものだ。

父さん。

母さん。

たしか葵は、今年医大に受かったと聞いたが……。

写真をみると、妙にチグハグなかんじがした。

写っているのは、どこからみても幸せそうな、優雅な家族。

しかし、どこか合成写真のような……俺の目だけが、笑って  
いなかった。

これを撮ったすぐあと、俺は家を出た。

寂しげな昔の自分の表情に少し切なくなっ  
て、静かに引き出しにしま  
いこんだ。

## #28 朝の「ロー」

「あ、おはようございますー！」

朝目覚めると、見慣れない部屋に見慣れないベッド。

ほんのり優也の匂いのする布団に一度顔を埋め、温かく出がたい布団を思いきりめくった。

寝室の扉を開けると、もう優也が朝のコーヒーをいれる用意をしていた。

黒が基調の高級感溢れるシステムキッチンに、コーヒーメーカーを手にして立つ優也は、かなり似合っていた。

「……………おはよ……………」

「よく眠れました？昨日寒かったんで、電気毛布にしておいたんですけど……………」

そんな気配りに、不覚にもときめいた。

「あ、コーヒーいれますけど、ホットですか？」

「あ…アイスで」

「はい。ミルクと砂糖は？」

「砂糖一つとミルク…」

「甘党なんですわ。パンでいいですか？さっきパン屋で焼きたてがあつたんですけど」

「お願いします…」

「じゃあ用意しますから、顔洗ってきてください」

「はい……………」

ひんやりした廊下を歩き、洗面所にむかう。

洗面台に、小さなメイク落としと真新しい歯ブラシ、洗顔フォームが並べてあつた。

置いてあったタオルに顔を埋めると、ふんわり優也の服の匂いがした。

置かれた洗顔フォームとメイク落としで顔を洗い、歯を磨く。

それからもう一度メイクをしてから出た。

「あの、歯ブラシとか……」

「あ、わかりました？とりあえずコンビニで買ってきておきました」

黒いシツクな冷蔵庫からバターを取り出しながら、続ける。

「昨日香帆さんがメイク落とす前に寝室に入れちゃったんで、悪かったなあ」と……よくわからなかったんで、好きなメーカーじゃなかったらすみません……」

慌てて首をふり、

「ありがとう……気が利くね」

朝、自分が寝ている間にパン屋やコンビニまで行ってくれたのか。

しかも、メイク落としまで買ってきてくれるなんて……

「照れるから、やめて……（笑）で、できましたよ！朝ごはんにしましよー！」

朝陽の降り注ぐテーブルで、優也のいれたコーヒーと焼きたてのい  
るんなパンが入ったカゴを前に座る。

コーヒーの香ばしい香りと、パンの優しい匂いが鼻をくすぐる。

私の前には、グラスに入った甘めのコーヒー。

優也の前には、湯気をたてているブラックコーヒー。

何から何まで世話してもらって、これではどっちが年上かわからな  
い。

「あ、洗顔フォームとか、持って帰って下さいね。香帆さん用に買ってきたやつですから」

「……………置いていつて、いい？……………また、泊まるかもしれ  
ないから……………」

そう言うと、優也は真っ赤になってバターナイフを皿に落としました。

そしてはにかんだように、

「片付けておきます」

と言って笑った。

## #29 管理人

「じゃ、また」

車でマンションの前まで送ってもらい、管理人のところまでついてきてもらった。

私が事情を話すと、

「おやおや、それはすまなかつたねえ。起こしてくれりゃよかったんじゃないけど……」

「いえ、そんな深夜になんてご迷惑ですから……」

「はて、それではあなたが、黒沢さんのコレかい？」

そう言って、管理人のおじいさんは親指を立てた。

「え、いや、ちがいますっ！てか、それも古いですよ……」

「だってお世話になったんじゃない？わたしが若い頃はのう……」

「ちよつとあんた！若い子がいるからって、そんなこと話すんじゃないよっ！」

おじいさんの背後から、おばあさんが顔をだして釘を刺す。

「……おーこわ……。あれでも昔は可愛いげがあつたんじゃが………」

悲しそうに呟くおじいさんに、私と優也は同時に吹き出した。

「じゃ、また」

鍵を開けてもらい中に入ると、優也が言った。

「え、お茶くらい出すよ？」

「うん、実は今すっげー帰りたくないです。でも試験前なんで、今日は練習しないといけないから………」

と、残念そうに言った。

あんまりはつきりと

今帰りたくない

なんて言うから、こっちが焦る。

「そ、そっか……それじゃあしょうがないね」

「……………」

「……………じゃっ、またね」

「え、うん……………」

「ありがとね」

「あ、はい。またいつでも……。なるべくキレイにします（笑）」

もう一度、じゃ、と言うと、階段に向かって廊下を歩いていった。

カッーン、という足音が、まだ冷たい廊下に響き渡る。

ときどき寒そうに背中を丸めながら、歩いていく。

その後ろ姿に、少なからず愛しさを感じてしまった……。

## #30 物思い

十優也 *side t*

香帆さんを部屋まで送りとどけたとき、香帆さんが部屋に案内してくれそうな雰囲気になった。

「お茶くらい出すよ?」

落ち着き始めていた俺の心拍数はまたしても上昇。

一人暮らししている気になる女の人の部屋にあげてもらっつなんて…

……

よからぬ妄想が、俺の脳内ワールドを占拠する。

仕方ない、若いんだから（笑）

しかし、あいにく来週にはピアノ科の実技試験がせまっている。

何度かレッスンに行けてなかった日もあったから、試験にすべてがかかっていた。

そんな文字が頭の片隅で点滅しだした。

「……………実は今すっげー帰りたくないです」

これは俺の精一杯の抵抗。

だけど香帆さんは大人だから、そんな俺の小さなあがきになんか気にもとめなかった。

仕方なく彼女に別れを告げ、マンションを出る。

帰り際に管理人のおじいさんが手を振ってきたので振り返し、とぼとぼと足取り重く車に向かう。

近所のおばさんの、車に対する羨望と驚嘆の視線をかわし、乗り込んでエンジンをかける。

車内に残った香帆さんの残り香に、しばし想いを馳せることにした。

今度、また何かチケットとって誘ってみよう。

香帆さん、喜ぶかな。

俺、なんでこんなに彼女のことばっか考えてるんだろう。

ふと思い立つのは、彼女の笑顔や彼女の声。

香帆さん。

どうやら俺の頭は、あなたのことばいっばいみたいだ。

## # 3 1 葵

十優也 s i d e t

部屋の中に入り、電気もつけずに冷蔵庫に向かう。

この部屋は日当たりがいいから、電気なんかつけなくても昼間は暖かい。

さっきまで香帆さんがいたこの部屋も、彼女の存在を察知できなくなると、急に味気ないものになるらしい。

冷蔵庫から取り出したミネラルウォーターを飲みながら、ふとカレンダーに目をやる。

あ、今日は夕方に病院だった。

じゃああんまりピアノ弾けないな。

そんなことを思いながらピアノの蓋をあけ、課題曲の譜面を取り出す。

と、インターホンが鳴った。

インターホンが聞こえなかったときのために、誰かが来ると壁が青く点滅する。

そんな仕掛け、以前はただうつつしいだけだったのに、最近よく役に立つ。

「……………はい」

重い腰をあげ、玄関に向かう。

ドアを開けると、そこにいたのは……………

「……………葵……………」

「久しぶり、兄さん」

「へえ、こんないい部屋に住んでんだ。これも父さんの金？」

ドアの向こうに立っていたのは、6年弱ぶりに会った、弟だった。

「……………何しにきたんだ」

「べつに、どうしてるかなって。あ、これグランドピアノじゃん！  
うわ、難しそうな楽譜だね」

「……………おまえ、医大に受かったんだってな」

わざと話を変えた。

俺は、過去に俺自身がした行為に、多少なりと罪悪感を感じていて、

あまり音楽にかかわる話題に触れなくなかった。

「まあね。これで俺も、父さんの役に立てるよ」

葵は、俺が全てを押し付けて家を出たことを、まだ恨んでいるのだろうか。

朝とは打って変わって、何ともいえない気まずい空気が、部屋中に漂う。

「今日は、少し様子を見に来たんだ。一度、こっちに帰ってこないか？」

「帰らないと、何度も言ってるはずだ」

「わかってるって。ただ、父さんも母さんも、兄さんに会いたがってるよ」

「……………」

過去の記憶が、脳裏に蘇る。

俺が黙り込むと、葵はあきらめたように言った。

「まあ、父さんの病院は俺が継ぐから、兄さんは音楽をやっていた方がいいよ」

「……………わるいな」

「なんで？俺は全然苦じゃないよ。永久就職決定だしね！ま、また気が向いたら顔だしにすれば？」

「……………ああ、そうする」

俺の返事をきいて、じゃ、と言つと部屋を出ていった。

苦じゃない、か。

それは、葵の本心でもあり、偽りでもあるだろう。

俺が過去にした行為は、今も葵を拘束している。

俺の今の生活は、葵の自由を代償に成り立っているのだ。

「……………」

また人気のなくなったこの部屋。

自分に纏わり付く何かを振り払うように、無我夢中でピアノを叩いた。

休むことなく指を鍵盤に叩きつけた。

乱暴に弾くことで鬱憤を取り除こうとする俺は、あのとときと少しも変わっていなかった。

## #32 追憶

十優也 *side t*

夕方、診察券を手に、病院へ向かう。

向かう道すがら、葵の言った言葉を頭の中で反芻する。

『一度、こっちに帰ってこないか』

無理だ。

過去の自分に、思いを馳せる。

昔、母さん……玲子さんは、子供をつくれないう体質だった。

しかし大病院の次期院長のポストにいた父さんには、どうしても後

継ぎが必要だった。

だから玲子さんは、父さんが愛人をつくるのも、黙認していた。

自分は、愛人であるドイツのバイオリニストと父の間に生まれた、  
正統な血筋でない子なのだ。

一応断るが、だからといって、俺がハーフなわけではない。

そのバイオリニストは、日本とドイツのハーフなんだそうで、つまりは俺はクォーターなのだ。

生まれてすぐ、俺は玲子さんに引き取られ、後継者として育てられた。

俺はそれから、実の母親である女性のことを、ただの音楽の先生だ  
と思い込んでいた。

しかし2年後、長年の不妊治療が功を成し、父さんと玲子さんの間に子供ができた。

それが、葵だった。

玲子さんは2人を分け隔てなく育ててくれた。

だけど内心ではやっぱり、正妻である自分の子に病院を継がせたい  
と  
思っていた。

それを知ったのは、ちょうど中学三年の秋だったように思う。

ジュリアードを退学して日本の公立中学に入った俺は、音楽をやめて、いつか父さんの病院を継ぐことを夢みて、医学部を目指して猛勉強していた。

トップクラスの進学校にも安全圏だというとき、偶然それを話している玲子さんを見てしまった。

今から考えれば当たり前前のことだし、むしろそれまで平等に扱ってくれたことが有り難いことなのだ。

だけどそれは今だからわかることで、当時の俺がそのとき受けたショックほど大きかったものは、後にも先にもないだろう。

それを知った瞬間、俺の中で何かが弾け、自分の存在を全否定されたような錯覚に陥った。

俺は音楽高校に進むことに決め、運よく受かった俺は、全てを葵に押し付けて家を出たのだった。

今はべつに玲子さんや葵を恨んだりなんてことはしていない。

ただ、一度折り合いが悪くなった関係を、正統な血筋の家族でもない俺から修復するのは、想像以上に重いものだった。

病院につく。

頭から過去の記憶を振り払い、気を引きしめて診察室に向かう。

春の大学での健康診断で、若干聴力に異常あり、と出た。

俺自身、以前と全く変わらない調子だと感じていたから、きっとそんなに悪くはないのだろう。

担当医も、一応音大生だという旨を伝えたと、毎月来るように言ったが、べつにさほど気になるところはないのだろう。

いつも聴力検査をして、そのあとはしゃべって帰るだけだ。

40代くらいの医者で、一度店に来てくれたこともあった。

クラシックにも詳しくて、気さくな人だ。

そんな診察の時間が、俺にとって気楽な、でも貴重な時間だった。

### #33 何か（前書き）

個人的な事情でいろいろ忙しく、なかなか更新できなくてすみませんでした。やっと少し落ち着いたのでまた少しずつ進めていきたいと思いますが、また更新ストップが予想されますので、ご了承ください。これからもよろしくお願いします！

奏多

### #33 何か

十優也 *side t*

「こんにちは」

「……………」

「？優也くん？」

「せんせ……………なに、これ」

1ヶ月ぶりに入った診察室は、完全なる変貌を遂げていた。

殺風景だった壁には海の写真が額に入って飾られ、

花瓶には冬なのに様々な花が活けられ、

おまけにクラシック音楽なんかが流れている。

しかも古典派の音楽。

「…………診察室の場所、変わったの？」

「何言ってるんだ、いつもの診察室だよ」

耳鼻科の個人医院の診察室だから、好きなように内装は変えていいけど、だからといって……………

1ヶ月前まで重ねてすらなかったカルテはファイリングして綺麗に本棚に並べてあるし、

よくよく見ると、履いているスリッパまで新しくなっているではないか。

「……………」

あまりの俺の驚きに、隠し通すことは不可能と観念したのか、ぼつりぼつりと話し始めた。

「…………いやね、こないだ高校の同窓会があつてね…」

「好きな人できたんでしょ」

「……………そう言われると元も子もないんだけど、まあそうなんだ…  
…お恥ずかしい話」

と、本当に顔を赤くして話し続ける。

「え、なんかドラマみたいだね。どんな人？」

「それが、当時学校のマドンナみたいな存在の彼女で、今はピアノ教室を開いているみたいなんだけど、この近くに住んでるみたいなんだ」

読めた。

その彼女がここに来たときのことを考えて、こんなに内装を一新したのか。

なんてわかりやすいんだ、先生……………。

「……でも、わかるよ」

「え、もしかして優也くんにもいるの？そういう人」

「ん〜、たぶん、そうなんだと思う」

もちろん香帆さんのことだ。

「へえ〜、優也くんがそんなこと話すなんて、意外だな。なんかすごい美人とかなんじゃない？」

「何でだ（笑）まあ、たしかに美人だけどね」

当然だ。

それからお互いに相手のことを想いながらしゃべり続けた。

たまに愛おしそうに目を細める先生は学生時代に戻ったように見え、  
なんだかかわいかった。

香帆さんのどういったところがいいのか、俺が先生に言うと、

「ああ、わかるよ」

と言って笑う。

「え、そうなの？」

「男は一度はそういう大人の女に惹かれるんだよ。ま、僕くらい年をとると、逆に若々しい人がよくなるんだけどね（笑）」

なるほど。

……………ということとは、俺が今香帆さんを好きなのは、ただそういう時期にいるからってだけなのか…？

……………ちがう。

それだけじゃない。

俺が好きになったのは、それだけじゃない。

香帆さんの中にある何か、言葉では表せないけど、そんな何かに興味をもったんだ。

……なんて、先生にも、ましてや香帆さんになんて言えるわけないけど。

## #34 カクテル(前書き)

なかなか更新できず、すみません……。。

## # 3 4 カクテル

「……………本当ですか？」

「もちろん。またさらに力を入れて頑張れよ」

「はい！」

前に優也に手伝ってもらって訳したドイツ語の資料。

あれをもとに交渉していたドイツの会社と、うまく提携を結ぶことに成功したのだ。

晴れてその会社に関する庶務は、すべて私の管理下におかれることになったのだ。

仕事がつましくいった日は、優也の店で高めの酒を飲むのが習慣になっていた。

上機嫌で帰宅の準備をし、いつもの道を歩く。

「今日はなんかご機嫌ですね。なんかいいことでもありました？」

やっぱり顔にも出てたみたい。

店に行くときすぐに言われた。

「えー、そんなわかりやすい？」

「はい、かなり。来たときからずっと笑ってますよ」

「うっそ、それはキモいな」

だって、仕事でうまくいくのって、生きてるって実感する唯一の時なんだから。

「今日うまく商談が決まって、私が管理することになったの」

「へえ、すごいじゃないですか!」

カクテルを造りながら嬉しそうに笑ってくれた顔が、なんかすごく温かった。

「前にドイツ語助けてもらったでしょ、あれのおかげ」

「いや、そう言っていただければ光栄です（笑）」

おどけて言う優也は、本当に日だまりみたいな笑顔をくれた。

なんだろう、こんなに優しく私に笑いかけてくれる人って、いたんだ……。

そんな気持ち。

「じゃ、今日は特別なやつ造ってあげます」

そう言って差し出されたのは、透明のエメラルドグリーンのカクテル。

一口ぶくむと、口いっぱいに爽やかな味が広がった。

「とっ。」

「……おいしい……」

「そっよかった」

そう言って、またカウンターの仕事に戻る。

それからしばらく無言だったけど、カチャカチャと優也がグラスを洗う音が何とも心地よくて、いつのまにか寝入ってしまった。

#### #34 カクテル（後書き）

おそらく、かなりのんびりした更新になると思います。 優也に弾かせたい曲などありましたら、ぜひ参考までに作者まで！

#35 オーナー

……目を覚ますと、カウンターだけが電気をつけた状態で、私の座っている以外の椅子は全部上げられていた。

いつかと同じように、また私の肩には優也のジャケットがかけられていた。

「わ、どーしょ、もうこんな時間……」

慌てて時計を見ると、もう3時を回っている。

急いで立ち上がりかけたそのとき、店の奥から誰かが出て来た。

優也……じゃない。

「え、あ、あの……」

出て来たのは、初老のおじいさん。

どこか気品のある、優しそうなおじいさんだった。

「すみません！閉店時間過ぎてるのに……」

急いで御会計をしようと財布を取り出すと、おじいさんは笑って言った。

「いやいや、これは優也からのささやかな祝いというところで……のう」

「でも……」

「よいから。今あやつはまだ準備しとるんじやが、ちゃんと送ってもらうんじやよ」

と言って、悪戯そうな目で笑った。

「誰じゃ、みたいな顔をしておるのう」

「す、すみませんっ」

思ったことがすぐに顔に出るのは、早く直したほうがいいだろう。

「わしが、この店のオーナーじゃ。ま、所有しておるだけで、全部あれに任せつきりじゃ」

オーナーさん……。

「あれとはちよいと知り合いでな。あれの家のことは聞いたかね？」

「い、いえ、あまり……」

「そうか。まあとにかく、あれは家と折り合いがうまくいってらん  
のじゃ。高校でこっちに来てからは、この店で働いてもらっておる」

……あんなに優しい優也が、家の人とうまくいってないの？

あんな広いマンションで、高校生からずっと一人なの？

優也の今までの行動からは信じがたかった。

「これはわしからのお願いじゃ。…あれと、仲良くしてやってくれんか」

そう言つて、オーナーは頭を下げた。

「や、やめてください」

「わしは、あれが不憫でならんのだじゃ。……いつもはあんなに笑つておるが、内心ものすごく寂しいんじゃ。……お願いします……」

涙目で私に頭を下げるオーナーをみて、私も少しもらい泣きしてしまつた。

#36 優也

「…………優也」

帰り道、突然立ち止まって呟いた。

「…びつくりした。突然、なんですか？（笑）」

やっぱり優しい微笑みをくれる。

こんな人が、家族と仲よくないなんて、やっぱり信じられない。

でも…………

「……………」ご家族と、うまくいってないの？」

一瞬驚いた顔をして、すぐに元の表情に戻った。

「……ずいぶんストレートに聞きますね（笑）」

「さっきオーナーから聞いたの。なんか、あんまり信じられないんだけど……」

優也は前を見つめたまま、なかなか口を開こうとはしなかった。

かといって自ら催促することもできず、無意味にジャケットの裾をのばしてみたり、爪を見てみたりして、次の言葉を待った。

「……前に、香帆さん言いましたよね。」

『千崎病院と、何か関係ある？』って

「>……」

そっといえばだいぶ前に、言ったかもしれない。

優也と初めて会った頃だ。

でも……

「でも、違うんでしょう？自分で言ってたじゃない」

あのとき私が言った言葉は、ほんの軽い気持ちで出たもので、実際に優也に否定されてから、すっかり忘れ去っていた。

「……………実はあれ、嘘、です」

「へ……………」

「俺、千崎病院の、院長の息子なんですよ」

それからしばらくして、優也はぽつぽつと話し出した。

「俺、本当は千崎の正統な血筋じゃなくて、愛人の子なんです」

「ずっと跡取りとして育てられてたんですけど、あるとき正妻である玲子さんとの間に、弟ができてしまって」

「玲子さんの意向としては、やっぱり弟のほうに病院を継がせたかったみたいで」

「だから、弟に全部押し付けて、高校生になる前に出て来てやったんです」

優也の口から出て来た話は、彼の温和な性格からはあまりにも掛け

離れていて、正直何と言っていかなかった。

ずっと一人でいて、それなのにずっと笑顔でいて。

私が今まで優也に話していた愚痴なんて、それとは比べものにならなくて。

それなのに、何も言わずにずっと聞いててくれていたんだ……。

知らない間に、私の頬を熱いものが伝っていた。

#37 笑顔

「……どうして香帆さんが泣くんですか（笑）」

優しく微笑みながら、ハンカチを差し出す。

それを受け取り、目元を押さえた。

「……わかんない……けど、なんか泣けてきて……」

「意味不明ですよ（笑）とにかく、泣かすためにこの話をしたわけじゃないんです」

「でも……」

「すみません、なんか暗い話しちゃって。オーナーのせいだ、今度文句言っとかないと（笑）」

いつもと変わらず笑っている優也。

けど、何でそんなに悲しそうに笑うの？

目が笑ってないよ……？

「……お願いだから、私の前ではそんな風に笑わないで」

「え？」

「……私、優也にいろいろ助けてもらった。だから……私の前ではせめて、無理しないで……」

私じゃ、ダメなのかな。

優也の助けになんか、なれない？

「……香帆さん……」

「……今度は、私が優也を助けたいの……」

涙まみれの女にこんなこと言われたって、全然説得力ないよね。

けど、言わずにはいられなかった。

私今、ひどい顔してるんだろうな……。

クールなOLが台なしだ……。

そのまま目をそらさずに、泣き止むのを待っていた。

夜道に私の噁り泣く声だけが響き、優也は何も言わずに立ち止まっていた。

と、そんなとき。

視界が一瞬暗くなり、突然体が温かくなった。

「 .....  
え .....  
? 」

#38 素顔

十優也 side t

帰り道、香帆さんが突然、俺の家族のことを聞いてきた。

さてはオーナーだな。

適当に流そうとしてみただけど、香帆さんは真剣に俺を見つめてきた。

隠し通せなくて、仕方なく昔話をした。

俺の血筋のこと。

葵のこと。

家を出たこと……。

話し終わると、香帆さんは涙を流していた。

べつに俺は、同情をさそって話したんじゃない。

だから、香帆さんが泣く必要はない。

あわてて笑ってみせると、香帆さんは涙目のまま呟いた。

「……………お願いだから、私の前ではそんな風に笑わないで……………」

「…私、優也にいろいろ助けてもらった。だから……………私の前ではせめて、無理しないで……………」

「……………今度は、私が優也を助けたいの……………」

香帆さんは一生懸命に、目をそらさないで話した。

そんなまっすぐな香帆さんの目をみて、俺はどうしていいかわからなかった。

無理なんて、してないよ。

……………本当に？

本当は、無理矢理笑ってたんじゃないのか？

暗い過去に触れられたくなくて、ずっと笑顔の下に本心を隠してきたんじゃないのか？

もう……………無理しなくて、いいの？

もう……無理矢理笑わなくて、いいの？

本当は、本当は自分自身を認めてほしかった。

それを素直に伝えても……いいの？

香帆さん、あなたは、俺自身を受け止めてくれるの……………？

俺は無意識に、香帆さんを抱きしめていた。

言葉もなく、ただ霞む目を閉じて、香帆さんの体をきつく抱きしめた。

そっと、背中に香帆さんの腕がまわるのを感じた。

香帆さんの前では、俺自身でもいいんだね……。

#39 勘違い

十優也 side t

.....まぶしい.....

.....朝か.....

.....「JJ」は.....?

.....

.....ええっ???!

な、なんで、ええっ???!

朝目覚めてみるよ、ベッドの中。

見知らぬ部屋。

そして、隣には……………

……………香帆さん。

思わずベッドから跳びおりて、あわてて状況を把握しようとして試みる。

…………… 昨晚、俺は香帆さんと帰り道に話していた。

で、感極まって泣きだしてしまって……

……しまった？

そのあと、どーしたんだよ俺……！

何で香帆さんと同じスレッドで……

……まさか……

あわてて辺りを見回す。

スレッドには、すずすずと眠る香帆さん。

二人とも、服は着ている。

……よかった……

よくねー！……！

服着てるからって、何もなかったという証拠にはならん……！

顔から血の気が引くのがわかった。

まさか、無意識に俺は……好きな女性に……しかも彼女でもない女性に……

嫌な妄想を、頭から振り払う。

とにかく、香帆さんを起こすことから始めよう。

まずはそこからだ！

キレイな寝顔を見せて無防備に眠っている香帆さんのそばに寄り寄る。

今から起こすのに、なぜか忍び足。

……香帆さん……すみません……

ふしだらな学生ですみません……

そっと覗き込むと、本当にキレイな顔をしている。

普段はパキパキしてるのに、寝てるときは意外に幼いんだなあ…

もう少し見ていたいという誘惑と、早く真実を確かめなければなら  
ないという焦燥に揺られ、しばらくベッド横をうろろろしてみる。

と、そのとき。

「ん……起きたの？」

なんと、香帆さんが目を覚ましてしまった。

安心と未練が入り交じった感情のまま、とりあえず挨拶をする。

「……………おはようございます……………」

「おはよ。よく寝れた？」

「はぁ……………」

「ここ、私の家。昨日大変だったんだから……」

と言って、目線を外して少し赤くなる香帆さん。

まさか……………マジですか……………

「大変……………だったんですか……………」

「もう、すっかり汗かいちゃったもん。おかげでさっきまで爆睡よ  
〜（笑）〜」

……………笑えません……………。

俺は、俺はなんてことを……………っ

「き、昨日はすみませんでした!」

「いやいや、私はべつにね」

「いえ、俺、実は……………昨日のこと……………あんまり、いやほとんど全部覚えてなくて……………」

香帆さん、申し訳ありません!!!

汗かくほどとか、無意識のくせに何やってんだよ!昨日の俺!!

「…覚えてないの?」

「はあ…。昨日、泣いたところまでは記憶あるんですけど……………その……………その後の記憶は、キレイさっぱり……………」

香帆さんの足元に土下座する俺。

「すみませんでした!！」

「いやいや、そんな……」

「いえ、俺は男として最低です!申し訳ありませんでした!！」

「そんな、最低とか言い過ぎ……」

「いえっ!謝っても許されないことを俺は……っ」

「そんな、ここまで運んだだけだし、謝られるほどのこととしてないし……」

「……ん……?」

「今、なんて……?」

「だから、昨日泣き疲れて寝ちゃった優也を、とりあえずうちまで運んだんだけど……」

へ。

目が点とはこのことか？

「え……じゃあ、その、俺と香帆さんが、何かしたとか……そういうことは……」

「ないよ！何考えてんのよ、も……」

よかった……

よかったあああ……！！！！

真っ赤になっている香帆さんの下で、思わず笑顔になってしまった。

「安心しました！俺が朝飯作りますから……」

はりきってキッチンに向かう俺。

やべ、すげえ安心してしまった。

泣き疲れて寝るとか、ガキか……

「香帆さん、卵どうしますか」

「……目玉焼き……半熟」

「りょーかい！」

とびきり旨い目玉焼き作ってやる。

#40 秘密

朝目覚めると、目の前には優也。

まだ霞んでいる頭で、ぼんやり昨日のことを思い出す。

昨日、私は優也に抱きしめられた。

あゝもしかして、このままどうにかなっちゃうのかなあ……なんて、  
呑気な私をよそに

あるうことが

優也は私を抱きしめた状態のまま、泣き疲れて寝てしまったのだ。

私が妄想を繰り広げている間、ずっと黙り込んだままの優也。

「……………ゆ、優也？」

緊張からか、声が少し裏返った。

恥ずかしくて顔から火が出そうだった。

……………のに……………

……………スー……………スー……………

……………え？

「優也??ね、ちょっと……っ」

夜道の街灯の下で、男に抱き着かれたまま慌てる私。

しかも私よりはるかに背が高い優也の体は思っていたより重くて。

離すこともままならない。

当の本人は、安心しきった顔で寝ちゃってるし。

「……もお……なんなのよ……」

なんとか背中に優也を背負う体勢に変えようと、必死で自分のマンシヨン目掛けて歩き出した。

ずるずる優也を引きずりながら、全力投球でこの重労働に挑む。

とりあえず優也の家より近い自分の家まで引きずって運ぶ。

優也と何かあるかも……なんて想像していた自分があほらしい……。

何とか家までたどり着いた頃には、汗びっしょりだった。

優也をベッドに寝かせると、シャワーを浴びて水を飲む。

グラス片手に、幸せそうに眠る優也を見つめっていると、イライラもだんだんおさまってきた。

重くなった瞼を持ちこたえ、ベッドのそばに寄る。

ベッド1つしかないしなあ…。

うちにはソファもなければ予備布団もない。

………仕方ない、か。

私が先に起きれば問題ないもんね。

ということで、そろりそろりと優也の隣に横たわる。

優也の温もりが、体に染み込む。

年甲斐もなくドキドキしながら、眠りの世界へ落ちていった………。

結局、優也のほうが早く起きてしまった。

同じベッドに寝てることを、どうやって言い訳しよう……なんて考えている間も、優也は一人で何か言っている。

どうやら、優也は私を抱きしめたことさえ覚えていないらしい。

言い訳もする必要なくなった！

とりあえず昨日「ここまで運んだことを言わないと……」。

「……………おはようございます……………」

「おはよ。よく寝れた？」

「はぁ……………」

「ここ、私の家。昨日大変だったんだから……………」

と言ったところで、昨日優也に抱きしめられたこととか、勝手に一人で妄想していたことを思い出した。

なんとなく気ますぐなって、目をそらす。

「もう、すっかり汗かいちゃったもん。おかげでさっきまで爆睡よ」  
（笑）」

ふっと笑顔が消える優也。

汗びっしょりな女なんて聞いて、ちょっと引いちゃったかな……。

でも、人に抱き着いて寝ちゃう優也が悪いんだから、仕方ないじゃない。

と、突然優也が頭を下げた。

「き、昨日はすみませんでした！」

本当に、昨日は大変だったんだから。重いし。

しかしここは大人に……

「いやいや、私はべつにね」

「いえ、俺、実は……昨日のこと……あんまり、いやほとんど全部覚えてなくて……」

覚えてないとか……昨日の労力と水分と塩分を返せ！

「……覚えてないの？」

「はあ……。昨日、泣いたところまでは記憶あるんですけど……その……その後の記憶は、キレイさっぱり……」

すると、おもむろに足元で土下座を شدした。

「すみませんでした!!」

ちよ、土下座とかまでする?普通……

慌てて立ち上がらせようとするけど、一向に顔を上げようとしな

「いえ、俺は男として最低です!申し訳ありませんでした!!」

土下座までされるようなことしてないって!

「そんな、最低とか言い過ぎ……」

「いえっ!謝っても許されないことを俺は……っ」

さっきまで水分と塩分、なんてセコいこと考えていた私も、さすがに焦るよ……。

「そんな、ここまで運んだだけだし、謝られるほどのことしてないし……」

……あれ………？

しばらく沈黙が続いた。

「今、なんて…？」

きょとんとした顔で、こっちを見上げる彼。

「だから、昨日泣き疲れて寝ちゃった優也を、とりあえずうちまで運んだんだけど………」

なんか、まずかった？

と、ためらいながら優也が口を開いた。

「え……じゃあ、その、俺と香帆さんが、何かしたとか……そういうことは……」

な、何、何言ってるんだ……!!

あわてて思いきり否定すると、安心しきって笑顔になる優也。

もー……何だ、そんなこと考えてたんだ……。

私だけ妄想してたわけじゃ、なかったんだ。

優也もそんな対象として見てくれてたんだー……。

よかった、私だけの空回りじゃなくて。

私を抱きしめたこと、全く気付いてないみたい。

あれは、私だけの秘密にしよう。

……なんて、思ってみた。

## # 4 1 思い出

「……………じゃあ、あの、失礼しました……………」

昼過ぎになって、いたたまれなくなったのか、優也が申し訳なさそうに立ち上がった。

「ごめんね、こんな狭い部屋で……………」

「い、いえ！元はといえば俺のせいですから…っ」

「ん〜……………（笑）」

否定はできない。

「でも、昨日ピアノの練習できてないよね。やっぱり起こせばよかったね」

「いえ！……………正直、ちょっと嬉しかったし……………」

へ？今、なんて……

「ゆう……」

「あ、もしよかったですけど、新しい課題曲決めてもらえませんか？」

……話変えたな……（笑）

わかりやすすぎだよ……

「課題曲？」

「はい。今度の課題曲をこの中から選んでこい、って何冊か渡されちゃって」

「でも、そんなの自分で決めたほうがいいんじゃない……」

だって学校の課題でしょ？

素人の私なんかが選んじゃまずいいんじゃないの？

「どれもとくにやりたいのなくて。香帆さんが弾いてほしいと思うやつにします」

「でも……………」

「大丈夫ですよ。軽い気持ちで選んでください。ほんと、何でもいいですから」

そう言いながら、学校の鞆から何冊かの楽譜の束を探し出す。

そんなこと言われても……………。

とりあえず差し出された楽譜に目を通す。

ベートーベン……………ショパン……………リスト……………

あっ！

「これ、これがいい!」

「ん?」

私が見ている間にくつろいでいた優也が、ゆっくりこっちに目を向ける。

「モーツァルトの……ピアノソナタ17番?」

「うん!……これがいい……優也さえよければ、なんだけど」

思わず笑みがこぼれる。

だってこの曲は……

「……私、前にも優也にモーツァルトのピアノソナタ弾いてもらったことあったじゃない?」

「ああ、うん。モーツァルト好きなの?」

「それもあるけど……お父さんが、よく弾いてくれた曲、なん

だ  
」

父親は、音大を卒業してから趣味としてピアノを弾いているような人だった。

特によく弾いていたのがモーツァルトのピアノソナタで、いつもそれを聴きながら眠っていた。

私が小学校に上がる前に事故で死んでしまったから、顔とかは正直あんまり覚えてない。

だけど、ピアノを弾く父親の背中が、今でも臍げながらも覚えてる。

それを思い出したのだ。

「……そうだったんですか……」

「そんなしんみりしないで。私この曲すごい好きで……。だから、優也に弾いてほしいの。……それじゃダメ、かな」

正直引くよね。死んだ父親の好きだった曲を弾いてほしい、なんて。

けど、どうしても優也に弾いてほしかった。

優也のあの温かい日だまりみたいな音色で、奏でてほしかった。

「……がんばります。ご希望にそえないかもしれないけど……」

「希望なんて！弾いてもらえるだけで十分なの」

そうして、少し笑ってみせた。

「そんな暗い顔しないで。そんな風に話たくて言ったんじゃないんだから」

「……うん」

そう言って、優也は静かに微笑んだ。

父親の大好きだった曲を、優也が弾いてくれる。

それはやっぱりすごく嬉しかった。

## # 4 2 課題曲

十優也 s i d e t

香帆さんの家を出てから、俺はまっすぐ大学に向かった。

練習棟に行き、ちょうど開いていた練習室の鍵を借りる。

休日にもかかわらず、練習棟の中はフルートやらホルンやらの音で溢れかえっていた。

ピアノの置いてある練習室は棟の一番奥にあるため、廊下に立ててある譜面台やら楽器ケースやらを避けながら、なんとか部屋までたどり着いた。

『使用中』の札をかけ、中に入って鍵をあける。

そしてピアノの前まで行くと、ついさっき決まった課題曲の楽譜を

立て掛けた。

モーツァルトのピアノ・ソナタ第17番KV570。

神童と呼ばれた彼の、数多いソナタの中の1つで、晩年に書かれた簡素で澄み渡った旋律が特徴の変ロ長調。

今までの彼の作品のような、華麗さや深さは影を潜め、彼がますます純粋な音楽の境地にあったことを示す作品だ。

………香帆さんのお父さんがこの曲をよく弾いていた、と言っていた。

そんな大切な思い出の曲を、俺なんか弾いていいんだろうか……

それに、『事故で亡くなった』とも。

前に泣いていたときの、『どこにもいかないで』の言葉。

あれは、お父さんが亡くなったときのことなのか……？

だとしたら、ますます俺でいいのか、なんて思ってしまっつ。

鍵盤に指を這わせ、穏やかに踊らせる。

指は穏やかに音を紡ぎだす。

それと同時に、絶対にお父さんには負けたくない、そう思った。

やがて曲は、緩やかな第2楽章に入った。

香帆さんにこんなにも深く印象を刻みつけたこの曲。

その思い出を、今度は俺が塗り直したい。

俺の曲にしてやりたい。

そこまで考えて、ピタッと指を止めた。

……何だ、この気持ちは……？

なんか、体の奥の方がモヤモヤする。

言葉ではなんとも表せない、ムカムカというかイライラというか…

…。

香帆さんのお父さんとは面識だってないんだから、好き嫌いなんかあるはずもないし……。

誰もいない練習室で、深く溜め息をつく。

わけがわからない。

何なんだ……???

### # 4 3 嫉妬

十優也 s i d e t

「それは、嫉妬だな」

次の日の午後、レッスンのない空き時間に女の子たちに話しかけている大悟の姿を見つけた。

俺が大悟の名前を呼ぶと彼女たちに、やっとしつこい奴を連れてきてくれる救世主が現れた、とばかりに見つめられた。

226

どれだけ嫌がられてるんだ、大悟……………。

そしてそれに気付かずめげずに話しかける奴のストロングなハートに乾杯だ…。

それでも彼女たちといようとすると大悟を、ひとまず回収する。

「なんだよ、せっかく仲良くなりかけてたのにー。優也が来たらみんなそっちばっか見んだろ。せっかく優也がレッスンの時間から計画してたのに……」

「……………。まあ、とりあえず座れよ」

ブツブツ文句を言っている大悟をベンチに座らせ、買ったいたコーラを渡す。

コーラを渡せば、単純なこいつはすぐに機嫌がもどる。

もどったのを見計らって、昨日からモヤモヤしてることを話した。

何でこんなにつづつづするのさ。

ずっと黙って聞いていた大悟は、話し終わるとクソ真面目な顔を  
して口を開いた。

「それは、嫉妬だな」

「……は……」

「嫉妬だよ」『嫉妬』！N・e・i・d、ナイト！」

習いたてのドイツ語を使ったがるとか、お前は小学生かッ！

「……それは『妬み』って意味の嫉妬だよ。……お前が言ってるのは、  
たぶん、Eifersuchtって方だと思っけど……」

「おっ、さすがドイツ人クォーター」

「……どこまでデリカシーのない奴なんだ……」。

「でも何で俺が、会ったこともない香帆さんのお父さんに嫉妬すんだよ」

「好きな女にそこまで強い印象を与えた男は、たとえ父親だって関係ねーよ」ま、あんまり聞かねーけどなっ（笑）」

父親にまで嫉妬すんのかよ、俺……………。

今までも付き合った女の子は何人かいたが、こんなに、自分が惨めになるほどに誰かを想ったことなんて一度もなかった。

付き合っただって、所詮そんなものだと思っていたのに……………。

香帆さんと出会ってから、俺はおかしい。

「ま、優くんカワイイっ」

「ウザい、大悟……………」

言葉ではそう言いつつも、きつと顔は真っ赤にちがいない。

わかっているからこそ、さらに情けない。

ニヤニヤしてこっちを見てくる大悟の横で、力無くうなだれた。

「なーに二人でニヤニヤしてんの？？さては、やらしいージャンル  
の話ですな？」

背後から遙がやってきた。

しかもう、顔をあげる気力もないくらい恥ずかしい。

「いや〜それが、優也のやつ、あのビューティフルレディ 香帆さ  
んのお父様にまでヤキモチ妬いちゃって〜」(笑)

だーッ、もう、言うなハゲ!!

もう恥ずかしすぎて、耳の穴から煙が出てきそうだ。

大悟じゃなくて、圭佑とか泉に相談すればよかった……………。

「……………へえ、優也、香帆さんと付き合ってるんだ……………?」

遥まで何を言うか!

「ノノノちげーよ!!」

「でも優くんはヤキモチ妬いちゃうほど好きなんだよね?」

「ノノノ……………うん……………」

「かーわいゝ優くん　　こんなの見たら、何人の女の子が悶えるか……………」

「……………」

……大悟あとで殺す……。  
/  
/  
/

## # 4 4 訪問

「香帆さん……?」

会社の昼休み、昼食をとり外に出たところで、誰かに呼ばれた。

振り返ると、黒淵メガネの青年が、驚いた顔で立っていた。

たしか優也の大学の友達の……

「たしか……矢野くん、だっけ?」

「はい。お久しぶりです!香帆さんて、ここの社員だったんですか」

「一応……。あ、もしよかったら、一緒にお昼、どう?」

ということで、私は矢野くと近くのレストランに入った。

「うわ、やっぱりこのへんの店ってオシャレですね。俺、浮いてないですか？大丈夫ですか？」

「そんなことないよー。矢野くんけっこう溶け込んでる」

「あ、ならよかった（笑）」

私は日替わりランチ、矢野くんはグラコロカレーを注文した。

天井ではダークブラウンのファンが回っていて、明るい店内にはヒーリングの曲が流れ、時折厨房から食器の重なる音が聞こえてくる。

最近お気に入りのレストランだ。

2人分のメニューが揃って、食べ始めた。

「香帆さんの会社って、あの大手の外資系ですよね？」

「まあねー。でも、中身は普通の会社と変わらないよ」

「でもそのIDカード、すっごい『デキる女』って感じします」

首から下げたままのIDカード。

このあたりには様々な企業のオフィスが乱立しているから、こっぴや  
つて外に出るときも必ずIDカードを下げておく。

これは別に社則とかじゃなく、ただ単に『自分はお前とは違う』っ  
てアピールするための、いわば自己満足のための慣習。

入社した頃はそれがデキる女のステイタスみたいで憧れていたが、  
実はその華やかな光景の裏側にはドロドロした感情が潜んでいるこ  
とに、徐々に気付いていった。

「…あつ…俺、フツーに『香帆さん』って呼んでましたけど、よ  
かったですか？」

「あ…ホントだね。全然気にしてなかった」

「だったらいいんですけど…。優也がそう呼んでたから、つい移

「っちゃって……。大人の女性に対して失礼でしたよね……」

そう言つて、矢野くんはシュンとした。

前はあんなに名前が嫌いだったのに……。

今は『香帆』と呼ばれることが普通になっている。

これも優也のおかげ、かな。

「いや、全然気付いてなかったから気にしないで？ 優也なんて初対面から名前だったし（笑）」

スプーンを止めて申し訳なさそうな顔をしてこちらを見ていた彼に、慌てて話を振る。

「と、とところで、今日はこんなところでどうしたの？大学とは結構、離れてるよね？」

彼の通う青葉台音大と私の会社とは、同じ港区内といってもそれなりに離れている。

しかも今は平日の昼だ。こんな時間に学生がうるつくような場所ではない。

「あー……やっぱりバレちゃいましたか」

「あたりまえ。この辺には、矢野くんみたいに若くて上品な子いないからね」（笑）

大手の企業ばかりが出揃う街だ。

行き交う人は、大抵がキビキビした感じの人で、矢野くんのようなゆったりした人はあまりいない。

私の質問に、彼はふっと真顔になって、口を開いた。

「実は、……………あなたに会いに来たんです」

#### #45 矢野くん（前書き）

前回から今回にかけて出てくる矢野くんとは、優也の友達の指揮科の矢野圭佑くんです。だいつぶはじめのほうで出したキャラなので、お忘れの方がいても仕方ないです（笑）。ちなみに今回出てくる斎藤さんとは、矢野くんのカノジヨの斎藤泉ちゃんのことです。

# 4 5 矢野くん

「私……に？」

真面目な顔がヤケに大人びていて、年甲斐もなく焦った。

斎藤さんゴメン。

「何でしょっ？」

「実は……優世のことだ」

へ。

「優世…のこと？」

「はい。……あいつの部屋、行ったことあります？」

な、何なのその直球な言い方っ。

いやあ……実際あるんですけど……君らくらいの年だったら、そつち系のほうに繋いでいくんじゃない？……？

「……あります、が、そんなヤマしいことは……っ」

「本棚見て、何か思いました？」

そんな冷静に返されると、慌てた私がバカみたいじゃないですか……。

これじゃどっちが年上かわからない。

「本棚……？」

「はい。例えば……ピアノとは関係なさげなもの、とか」

「あー………そういえば、やけに指揮棒とかスコアとか置いてあるなあ……と」

そう。

あの日に感じた疑問は、やっぱりどこかで引っ掛かっていた。

ピアノ科なのに、スコアがあんなに大量に並んでいたこと。

指揮科や管弦楽科の人なら、なんとなくわかるけど……。

やっぱりピアノ科の人もスコア見たりするのかなあ、なんて思って、  
優也には聞けないままになっていた。

「そう…ですか……………」

「やっぱりピアノ科でも見るもんなんだね！まあ優也はオーケストラも好きみたいだし、スコアも見たりするのかも」

オーケストラの曲が好きだったら、やっぱりスコアにだって興味が湧くにちがいない。

ピアノ曲で好きなのがあったら、自分で楽譜を買ったりするのと同じように。

そうやって軽く話す私の前で、矢野くんはすごく真剣な顔で黙りこんでしまった。

「あの一…矢野くん…」

「香帆さん。今から俺が言うことは、あくまで『過去』です。でも、やっぱり香帆さんには知っておいてほしくて……。けど、これは俺の勝手な判断ですから、聞くか聞かないかは香帆さんに任せます」

あまりに真剣な顔でこっちを見つめてくるから、さすがに私も笑っていられなくなった。

沈黙が訪れ、店内の微かなざわめきがやけに大きく耳に響く。

私知っておくべき、こと？

優也のことだ。

それとスコアとがどう関係あるんだろう。

私は思い切って、口を開いた。

「……何

……？」

## # 4 6 断念

会社に戻り、デスクにコーヒーを持ってきてもらって、溜め息をつく。

正直なところ……。

私が聞くには、重い話だった。

「実は……優也、指揮科の進学希望だったんです」

「指揮、科？ピアノ科じゃなくて？」

「はい……まあいろいろあって、どうしてもピアノしか出来なくな  
って」

どこか悔しそうな、悲しそうな、そんな微笑みを浮かべながら、矢野くんは空いた皿を見つめていた。

「優也が、シューマンの幻想小曲集とか弾くの、聞いたことあります?」

「え、ないけど……」

「また聞いてみてください。……あいつ、ピアノだけじゃ本当はダメなんです。表現したいことが、ピアノだけじゃおさまらなくて……」

「…それは、指揮志望だったから?」

「というより、優也は天性っていうか、音楽の才能みたいなのが人よりすごくあって」

それはわかる。

優也の演奏は、どれも他の人とは比べものにならないほど素晴らしい。

むしろ、『素晴らしい』なんて言葉じゃ表せないくらい、彼のピアノには訴えかけてくるものがあるのだ。

「…俺が指揮科に進むことになったとき、一番行くべきなのはあいつだったのに、そんなこと何も言わないで応援してくれて。……けど、優也がどれだけ行きたがってたか知ってるのに、俺なんか行っていいのかな、なんて実は未だに思っんですよね」

こんなこと話したら、逆に泉とか遙に締め上げられますから、内緒ですけど、と矢野くんは笑った。

過去に優也に何があったのかは知らない。

けど、優也も本当は、指揮者になることを諦められないんだよね。

だから、スコアだって指揮棒だって捨てないで置いてあるんだ。

オーケストラのコンサートだって、もしかしたら舞台の指揮者に自

分を重ねて見てたのかもしれない。

私、何も知らずにコンサートに誘ったりしてた。

それがもしかしたら、優也にとって辛いことだったかもしれないのに……………。

「…香帆さんには優也と指揮のこと、知っておいてほしくて。何でかは自分でもよくわからないんですけど……………あなたのこと、優也は本気だと思っんで」

そこで回想は終了した。

『あなたのこと、優也は本気だと思っんで』

矢野くんが変なこと言うから、優也のことを考えるたびなんかおかしくなってしまふ。

そして、今私の手にはチケットが2枚。

「実は、今度指揮科の催しとして、チャイコの弦楽セレナーデを俺が振ることになって。……俺からだと言いくいんで、香帆さんから優也に渡してください」

あんな話聞いたあとじゃ、いくら私でも渡しにくいからっ (泣)

……『いろいろあって』って、何があったんだろう……。』

## #47 試し

「どうしたんですか？そんなに見つめて（笑）」

いつも通りに仕事帰りにmoderatoに行き、閉店までいる。

優也がグラスを洗っている間、やっぱり顔を見つめてしまう。

矢野くんの言っていたあの話。

何があったのか、やっぱり気になる。

でもあえて矢野くんは隠したわけだし、よっぽどの事情があるんだろう。

それを、彼女でもない私が聞いていいはずがない。

「かーほさん？顔が固まっていますよ？彫刻みたいです（笑）」

そうやって明るく笑う顔の裏に、一体どんな過去を持っているんだろっ……

「優也に弾いてほしい曲、あるんだけど……」

「おっ、久しぶりですね〜！店のピアノでよければ今弾きましょうか？楽譜入ってるやつなら、ですけど」

Moderatoには、隅のほうに茶色いピアノがある。

壁にくっつける型のアップライトピアノだが、店の雰囲気に合っただけのトロな感じのするピアノだ。

気まぐれで優也やオーナー（！）が客に弾いてあげたりするらしく、常に調律されてて綺麗に手入れされていた。

「えー…シューマンの幻想小曲集なんだけど…」

とりあえず矢野くんの言っていたとおりに、リクエストをしてみる。

「あゝ、あれですか！シューマンであんまり弾かないんですけど、あれはかなりいいですよ。どれがいいですか？」

「ゆ、優也のおすすめのやつ…」

「ん、メジャーなところだと《飛翔》とかですけど、俺はやっぱり《夜に》なんかが好きなんですけどねー」

「じゃ、じゃあそれでっ」

わかりました、と手を拭きながらカウンターの奥から出てきた。

なんとなく機嫌よさそうに笑っていて、急に自分のしてることが優也に対して申し訳ないような気になってしまった。

あんなに嬉しそうにピアノに向かう優也。

なのに私は、優也が本当に指揮者になりたかったのか、なんていうことを試すために、こんなことを頼んでるんだから………。

優也は椅子に軽く腰掛けると、鍵盤に指を置き、そつと弾き始めた……。

## # 4 8 夜に

迫り来る音の波、波、波 ……。

優也の指から生まれ、紡ぎ出される音の流れは、私の周りの空気を  
一気に変えた。

繊細で壊れ物を扱うかのように奏でたり

かと思えば、体中から音を放出しているかのような、魂の叫びみた  
いな音を叩いたり。

まるで、彼自身が楽器であり音楽であるかのように、音と一体とな  
った優也の姿がそこにはあった。

いつかの、学園祭のときの彼を思い出す。

ピアノ協奏曲を、あたかも彼自身がピアノで、その会場全てを支配するかのように、歌い上げた彼の姿を……………。

「……………て曲なんですけどー、俺は幻想小曲集の中ではこれが一番好きです」

矢野くんの言っていたことが、私にだっていやでもわかる。

「香帆さん？」

あなたが、どれだけ指揮者になりたかったのか。

「香帆ちゃん……………」

あなたが、どれだけ今でも、なりたいと思っているのか。

優也がピアノの蓋を閉めて、こちらに向き直る。

「香帆さん？いきなり何で泣いてるんですかっ（笑）」

「ゆー…や」

「この曲はわりと自信あったんですけどね…。…あ、もしかして香帆さん、感動しちゃった？」

「ゆうや…」

「これね、大学上がってすぐくらいに弾いたやつなんですよ。すっげー印象深くて」

「ゆうや」

「これ、結構多彩でおもしろいでしょ？なんかオケやってるみたい  
に錯覚を……」

「優也っ！」

優也の声を遮った私の叫び声が、薄暗い店内に響き渡った。

叫ばずにはいられなかった。

優也が

泣いていたから。

# 4 9 力

「あれ、すいません、変だな、俺……これ汗ですからっ」

慌てて私に背を向け、必死で平静を装う。

無意味だって、わかってんのに。

私が気づいてないとも思ってるの？

「……イマドキ、女子中学生でももつちょいマシな嘘つくよ」

こっちに背を向けたままの優也に近づき、後ろから抱きしめた。

「かつ、香帆さん!？」

「ごめんね……実は、優也が本当は指揮者になりたかったの、知っ

てるの」

「え……？」

「この曲弾かせたらきつとわかると思うって言われて……本当に」  
めんなさい！私、すごい無神経だった………」

そつと背中から離れ、優也の前に回り込む。

優也の目はやはり、涙で濡れていた。

いつも気丈で慰めてくれる優也が、私の前でこんな風な顔を見せたのは、これで二回目だ。

「優也に、もう絶対こんな顔させないって、前に誓ったのに……私、ほんとに何やってんだろう………」

「香帆さんは全然悪くないです！俺が勝手に………」

「……よかったら、何があったのか話してくれないかな……。私……  
……優也の力になりたいよ……？」

顔を覗きこみ、優也の目を見つめる。

私は音大生でもないし、指揮者志望でもない。

役に立てることなんて、正直ないかもしれない。

わかったような口きくな、とか言われても仕方ない。

でも、それでも……

優也の力になりたいって、本気でそう思った。

今まで、学校でも職場でも、周りの人は皆自分の敵になる、と思っ  
てほとんど関わるうとしてなかった。

そんな私が、ほんの少しずつだけ周りと溶け込もうと思えたのは、  
優也の優しさがあったから。

優也……………

「私、何にも言えないかもしれない。でも、優也だけ苦しんでるな  
んて、そんなの嫌だよ…！」

自分でも何言ってるのかわからなくなってきた。

言葉では表せないけど、伝わって……………！

「……………すっごくいへびーになっちゃいますよ…っ？」

優也がやっとな顔をあげた。

「全然平気。むしろライトだったら反応に困る」

そう言うと、優也は少し微笑んで私の手をそっと掴んだ。

「今から話すことを、香帆さんも背負う必要は全くないからね？」

そんな前置きとともに、優也はゆっくり口を開いた……。

## #50 孤独

「ジュリアードを退学して……」

ゆっくり優也は話し始めた。

「すっかり自信をなくしたまま帰国したんです。普通の公立中学に編入して、父親の病院を継ぐために進学校のトップのクラスを志望してました」

こんなにピアノが天才的な優也が、普通の中学生だった頃もあったんだ……。

「けど、偶然父親と玲子さんが話しているのを聞いてしまった」

玲子さんっていうのは、たしかお父さんの正妻、つまり本当の奥さん。

優也はお父さんと、ドイツの女性との間に出来た子なんだとか。

前に軽く聞いたとき、そう言ってた気がする。

「父親ははじめ愛人の子といえど長男の俺に継がせるつもりだったんですが、玲子さんは弟の葵を後継者に立てたかったみたいで」

前にも一度聞いたけど、改めて聞くとやっぱり辛い。

今まで頑張ってきたことを全否定されたも同然なんだもの……。

「まあ、今考えたらそれが普通なんですけどね、やっぱりショックで、全部を葵に押し付けて音楽高校に入学しました」

「とりあえず高校はピアノ科にいて、でも大学では絶対指揮科に進学しようと思ってたんです」

「指揮法も理論も独学で勉強して、大学に備えてたんです。けど、高3の春のときでした」

優也はそこで一度、言葉を切った。

目を閉じ、一息に話し始めた。

「大学進学の際に、うちの大学は身体測定があつて。そのとき……  
……聴力が落ちているから、指揮科に進んでも指揮者になるのは難しい、と言われたんです」

言葉を切り、深く深呼吸をして続ける。

「普段の生活には全く影響なかったし、普段はピアノだから音が合  
わせられないなんてこともなかったから、全然気がつかなかった……  
……」

目を閉じたまま、少し顔を歪めて話す。

当時のことを思い出しているのだろうか……………？

当たり前になんかそんなの、辛いに決まってる。

自分が本気でしたいことができないなんて、そんな辛いことはない。

「俺は、指揮者になるために音楽の道を選んだんです…！はじめにピアノ科にいたのだから指揮者になるのにピアノは必要だったからで……………。普段の生活では全く支障ないし、ピアノ科にいないことに関しても、特に問題はない。ただ……………指揮者には、なれないって……………」

ずっと閉じていた瞼から、一筋の涙が頬を伝う。

「日本では治療できる医師がいなくて、今有名な先生はドイツにいるんです。親には頼れないし、だからバイトして稼いで、まとまった金ができたら治療しにいくつもりです」

そこまで言つと、優也は言葉を詰まらせ、声をたてずに泣いていた。

辛すぎる。

そんなの、辛すぎるよ……………！

二度と優也にこんな顔させたくないって、前に強く思ったのに。

何もできない自分が不甲斐ない。

いつも私よりも大人な対応で、辛いときには支えてくれたのに。

私の力ではどうしようもできない現実に、胸が痛くなる。

優也……………。

家族にも頼れずたった一人で、辛い現実と向き合ってたの…？

どれだけあなたの中に、深い悲しみがあるの……………？

# 5 1 想い

私はただ、泣き続ける優也を抱きしめるしかできなかった。

「大丈夫だよ」

とか

「優也ならできるよ」

なんて言葉を、口にするのは簡単だけど、

そんなものを、容易に発するなんて、できなかった。

大人びているとはいっても彼はまだ学生で。

正直、まだ家族の優しさが必要な年齢なのに。

彼はそんな優しさに、甘えることが許されないなんて……。

「……優也、話したくなかったこと無理に聞いたのに……私、何にも言っただげられない……。頼りなくて、本当にごめん……」

仕事のデスクワークはできるのに、

大事な人が困ってるとき、必要な言葉もわからない。

そんな自分がたまらなく嫌だ。

「……いい。……香帆さんが傍にいてくれたら、それでいい……」

そう言って、抱きしめてる私の背中に腕をのばした。

「本当に？私、何にもできない……………」

「変に言葉をかけられるより、こっちのほう全然いい……………」

それから私たちは交わす言葉もなく、誰もいない店内で抱きしめ合っていた。

ふっと私の肩から顔をあげ、顔を覗き込んでくる優也。

「ゆうや……………」

完全にもらい泣きで、目がうるうるの私。

格好悪いから見ないで……………っ。

「わっ私……！／／／／」

「俺………」

「………香帆さんが、好きです」

## # 52 告白

十優也 s i d e t

香帆さんが、抱きしめてくれる。

彼女の体温がすごく心地よくて、ものすごく久しぶりに心から安心できた。

きつと、自分が玲子さんの実の子じゃないと知ってからは、こんなに落ち着けることってなかったんじゃないかな。

大学にも大悟たちみたいなお友達だっているし、幼なじみの遙だっている。

だけど、いつか彼らも自分から離れちゃうんじゃないか。

みんなには悪いけど、そんな不安はずっとあった。

だけど……………

大悟たちに比べたら、出会ってからまだそんなにたっていない香帆さんなのに、

彼女なら、もしかしたら大丈夫かもしれない。

彼女なら、過去や弱い自分を見せても、自分から離れないでいてくれるんじゃないか。

そう思えた。

しばらく抱き合っていて、徐々に気持ちが悪くなり落ちて着いてきた。

冷静になってみると、もしかして今すごく恥ずかしいことしてるんじゃない……

わんわん泣いて、抱きしめてもらって。

やべえ……急に恥ずかしくなってきた……。

香帆さんはなんだか柔らかくて、ほんのりいい香りがした。

なんだかこのままずっといたい気分になってきた……。

戻ってこい、俺……！

せっかく慰めてもらってるのに、妙な気おこしたら軽蔑される……！

それからしばらくは理性と欲望の葛藤が続いた。

死ぬ気で妙な欲望を振り切り、なんとか香帆さんから体を離れた。

ふっと彼女の顔を見下ろすと、香帆さんはずっと泣いていたのか、目が潤んでいた。

彼女がこんなに親身になってくれたのに、俺って……っ！

自分が情けなくなりつつも、最後の最後に誘惑に負け、香帆さんの顔を覗き込んでしまった。

ほんのり紅潮した顔に、上目使いで俺を見つめる目が潤んでて……。

「わっ私……………！」

「俺……………」

これ以上、自分の気持ちを押さえ込むなんて、無理だった。

「……………香帆さんが、好きです」

### #53 初めてのキス

「……………うえっ?!」

しっ、しまった……………雰囲気ぶち壊しじゃん……………

「すみません、なんかタイミングおかしいですけど、言っちゃいました」

「はあ……………」

「……………ああ〜っ、本当はもっとムードあるときに言いたかったのに……………」

そう言っつて、真っ赤な顔で頭をかく彼。

雑誌とかに載ってる、『こんな風に告白されたい』とかいう特集では、まず取り上げられないだろうこの状況。

思いがけない突然の告白に、頭がついていかない私は、ただあわあ

わしていた。

と、急に優也は真剣な顔を私に向け、口を開いた。

「好きです。気がついたらずっと香帆さんのこと考えてて……。香帆さんと、もっと一緒にいたいです」

どうしよう、嬉しすぎる……。。

私だけが、気になってるのかなって思ってた。

優しくしてくれてるのも、やっぱり客だからなのかなあゝなんて。

でも……優也の真剣な目を見たら、これが冗談なんかじゃないことぐらい分かる。

「こんなこと言ったら引かれるかもしれないけど……正直、香帆さんを俺だけのものにしたいです。俺だけ見ていてほしいし、俺だけに甘えてほしい。……さっき泣いてた奴に言われても、説得力ないと思うけど……」

そんなに綺麗な目で見つめられながらそんなこと言われたら、誰だって頭がポーツとしてくる。

優也以外の人に同じこと言われたら、正直引くと思う。

もともと独占欲強い人は苦手だし。

けど……自分が好きな人だからなのかな、逆にそんな言葉が嬉しく感じる。

「……しも……」

「えっ？」

「……あたしも……優也に私だけ見てほしいよ……？」

「え…っ、それって……………」

赤い顔で慌てる優也。

自分が言った言葉でそんなに動揺されたら、こっちまで恥ずかしくなってくるじゃん……………／／／

「優也が好きだよ……………？……………だから、私のものでいてほしい……………」

最後の最後に、何でこんなに可愛くない言葉が出てくるんだろっ……………。

こんな自分が嫌だ。

なんだか視界がぼやけてきて、思わず目をつぶると、急に抱きしめられた。

「ゆっ、ゆーや?！」

「……香帆さん、反則です…… / / 何なんすか、可愛すぎなんですよ / / / /」

肩越しに、優也が照れてるのがわかる。

なんで優也はそんなに良い風にとらえてくれるんだろう。

おそらくトマトみたいに真っ赤になっているだろう優也が堪らなく愛しく思えて、自分から優也の腰に腕を回した。

…や、やっぱり恥ずかしいかも…… / / /

「…俺と一緒にいてください」

「…」

その日私たちは、薄暗い店の床で、初めて唇を重ねた

……。

# 5 4 妖艶

「…………… / / /」

帰り道。

いつもより少し遅い時間の夜道は、いつもにもまして人が少なかった。

家まで送ると言ってきたきかない優也と、手をつなぎながらゆっくり歩く。

だけど……………いつもは優也がいろいろな話題を振って私がそれに答える形だったのに。

今日の優也は、全く喋らない。

「…………… ゆうや」

「はっ、はいっっ?！」

前を向いたまま声をかけると、少し裏返ったような優也の声が頭上から降ってきた。

「……私口下手だから、優也がなんか話振ってくれないと、困る……」  
「よ」

なんでこんな風にしか言えないんだろう……。

「あつ、す、すいませんっ！なんか俺、まだ信じられなくて……っ」  
「へ?」

「香帆さんの彼氏が、俺だなんて。香帆さんは何ていうか、高嶺の花というか、とにかく雲の上の人だったから」

「何言ってるんのー（笑）私だって、こんな年上でいいのかなあって、ずっと考えてるよ」

そう。

優也はまだ21歳の学生だけど、私はもう26だし社会人。

年の差は5つといえど、学生と社会人との立場の違いは、優也にとつたらどうなんだろう…？

「私は社会人だし、たぶん仕事とかの愚痴もいっぱいしちゃうよ？」

「愚痴聞くのは平気だし、つか香帆さんなら何でも許しちゃうと思う」

「でも……………」

「俺も大学の愚痴いっぱい言いますし、また課題曲もいっぱい聞かせると思います。これでおあいこでしょ？」

……………やばい。

そんな笑顔見せられたら、何も言えなくなっちゃう。

こんな素敵な学生クンに思いきりハマッてるのは、私のほうなのかも。

急に立ち止まると、手を繋がれた優也の足も必然的に止まる。

どうしたんですか？、と赤い顔で不思議そうに振り返った優也に、思わず抱きついた。

「へえつつ？！」

途端に硬直する彼。

恥ずかしくて顔をあげられず、優也の服に顔を押し付けたまま話す。

「……好き。……好き……」

いい年した大人が、馬鹿の一つ覚えみたいに『好き』を連発する。

何やってるんだー……。

「かつ、香帆さんっ／＼／」

「……一つ、お願いがある……んですけど……」

「なに？」

「……敬語、禁止」

やっぱり可愛くない言い方。

「…努力します（笑）」

「あっ、もう減点！」

「あー、…うー、だってもう慣れちゃってるんだもん」

『だもん』って、かわいすぎる……

私のボロアパートに着く。

真夜中だから、すでに管理人さんは夢の中。

「……じゃあ、ね」

「うん……あっ、そうだ、香帆さんに聞きたいことあったんだ」

え……？

私に聞きたいことって……？

「……今日のシューマンの件、誰に聞いたんですか？」

「へ？」

「『この曲弾かせたらわかると思うって言われた』って、言っ  
てな  
かった？」

そつえば……

すごい記憶力だなあ……。言った私もすっかり忘れてたのに。

「あ、えーっと、矢野くん……」

「圭佑？」

優也はきょとんとした顔つきで、こちらを見つめた。

「う、うん。今日の昼休みに、矢野くんが会社のところにて、一緒  
にお昼してたときに聞いて……」

「ちょ、ちょいストップ！……圭佑とご飯食べたの？泉も？」

「うっん？矢野くんだけだったけど…？」

「……………」

矢野くんのこと、まずかったかなあ？

でも彼すごく優也のこと心配してたし……悪いことしてないんだし、いいよね？

あ、でもやっぱり男の人は友達の心配してるの知られるのって恥ずかしいことなのかも……………。

「……………楽しかった？」

「へ、まあそれなりに……………」

「……………お仕置き……………」

へっ、と反応する前に、私の唇は彼のそれに奪われていた。

人気がない夜道で私をコンクリートの壁に押し当て、強く甘く何度も私の唇を求めた。

こんな熱いキス…できるんだ……………。

唇をそっと離し、じっと見つめてくる彼は、外灯の明かりに照らされてどこか妖艶だった。

「…………… / / /」

「……………圭佑と二人きりで会ったお仕置き」

そう言って笑うと、もう一度額に軽くキスして帰っていった。

力が抜け、地べたに座り込んでしまったのは言うまでもない。

## # 5 5 春

季節は変わり、優也は4回生になり、私も新しい部下の指導に忙しくなった。

私が大学生だった頃は、4回生といえばもう回りの大多数が就職の内定をもらってて、例に漏れず私も黒いリクルートスーツとパンプスで勝ち得た憧れの会社での新しい生活に、思いを馳せていた。

たしか内定もらってから、のんびりしていればよいものを、語学を磨くために外国一人旅とかいろいろ忙しくしてたっけ。

しかしやっぱり音大だからなのか、優也だけに限らずどこかのほんとした空気を保っていた。

相変わらず仕事の帰りに優也の店に行き、閉店までしゃべる。

前と違うのは、そのあと手を繋いで私の家まで送ってもらおうようになったこと。

「香帆、最近忙しそうだね。ちゃんと寝れてる？」

付き合うようになってから、優也は私のことを『香帆』と呼ぶようになった。

呼び捨てで呼ばれるたびに、ひそかに胸がドキドキしてるの、気づいてないでしょ。

「ん〜……今新入社員の指導が大変なんだよねー。仕事自体はそこまでなんだけど」

「そっか。香帆はすぐ無理するんだから、たまにはしっかりと休まないダメだよ？」

「うう〜……でもなあー……」

「……香帆に何かあったら、俺が困る」

一気に顔が火照るのがわかった。

甘い言葉をかけられると、どうしていいのかわからなくなっちゃう。

たぶん優也のことだから、無意識に言ってるんだろうけど……。

「ゆっ、優也こそ、ちゃんとピアノ弾いてる？」

話を無理矢理変えると、それに気づいているのかいないのか、のほほんとした笑顔で答える。

「まあ、相変わらずかな。大悟と泉は就職希望だから、音楽事務所とかレコード会社とか回って内定もらってるみたいだね。圭佑は実家の楽器会社に永久就職内定してるし、遙はピアノの先生やるんだってさ」

やっぱり音大出だとそういう就職先になるんだ。

なんか未知の世界。

でも……………優也は？

「優也は、どうするの？」

「え？……………うーん……………まだ考え中、かな」

「えっ、そうなの？早めに決めないと、あとで困っちゃうよ」

「うん……………そだね」

このとき、私はこれからも当然優也はずっと私のそばにいと、信じて疑わなかった。

優也がこのとき何を考えていたのか、頭の固い私には全く予想だにできなかった……………。

# 56 聴力

十優也 s i d e t

4月。

香帆さんと付き合うようになった俺は、締めなくなり毎日によにやし  
ながら過<sup>り</sup>していた。

『香帆』と呼ぶようにしたのは、やっぱり少しでも年の差を埋めた  
いから。

でも呼び捨てにするようになってから、香帆がはにかむ回数が増え  
た。

前に自分の名前が嫌いだと言っていた香帆。

少しでも彼女のコンプレックスが軽くなったら、嬉しい。

香帆……

香帆に会いたい。

昼間でも無性に会いたくなる。

彼女は新人社員の世話で忙しいみたいで、店に来てもカウンターでこてんと眠ることが多い。

眠る香帆はたまらなく可愛くて、そんな彼女が俺の恋人だなんて、まだ信じられない。

客がいなくなったあと、必死でキスしたい衝動に堪え、片付けをする日々だ。

寝込みを襲う趣味はないし。

そんな矢先、俺がひそかに描いていた幸せな生活を揺るがすことが起こった……。

「……え……今言ったこと、本当ですか……？」

「……うん……。……ほんの少しだけど、去年よりもまた聴力が落ちていきます」

春の健康診断。

聴力の診断だけは他の奴より細かいものをやってくれるようになっていた。

そして今日、大学の健康センターに呼ばれて、俺の診断をした医者に結果を聞いたのだ。

頭を鈍器で殴られたみたいだった。

しかし医者の前に黙り込むこともできず、なんとか声を搾り出す。

「……どのくらい、落ちてますか…？」

「いや、程度としては本当に少しだけなんだ。普通の人なら気付かないくらい。……ただ、少し低音が聞き取りづらくなって……。……通院はしてるんだよね？」

「はい……月一で……」

「……毎年言うようだけど、君の病気は手術しないかぎり、良くなることはないんだ。徐々に、けど確実に聞こえなくなってくる」

「……音大生の君にこんなことを言うのは酷かもしれないが、もう一度主治医の先生と手術も含めて話し合ったほうがいい」

……手術……。

けど……

「……はい。……ありがとうございます……」

センターを出て、一人外のベンチに座る。

少し離れたところでは、学生が真剣に楽器を吹いたり発声をしていたりしていた。

それをぼんやり眺めながら、今言われたことを頭の中で反芻してみた。

『ほんの少しだけど、去年よりもまた聴力が落ちています』

『徐々に、けど確実に聞こえなくなってくる』

無意識にケータイを開く。

指で香帆の番号を出し、通話ボタンを押す直前に思い止まる。

……こんなこと、彼女に言っただろう？

どうにもならないことなんだから、余計に彼女に心配をかせぎたくない。

…同情は、いらさないから。

そこまで考えて、我に返って頭を振った。

「……俺……最低だ……」

何考えてんだよ、俺。

『同情』なんて、彼女がそんな風に思うはずがないのに。

あんなに心配してくれてる香帆に、こんなこと思うなんて……………。

頭を下げたまま、しばらく動けなかった。

こんなによく聞こえているこの楽器の音も、全く聞こえなくなる時  
がいつか来るのだろうか。

……………彼女の声も、聞こえなくなる時が、いつか来るのだろうか…  
……………。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5664c/>

---

moderato.

2010年11月7日01時07分発行